# 仮想世界で繋がる縁

ガチタン愛好者

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

２度目の人生を歩み始めた主人公。だがそこは異世界では無かった。見慣れた光景に混ざる見慣れない光景。仮想世界で彼は何を見るのか？そして何を得るのか？

不定期更新ですが、投稿は１８：００に行います。

# 目次


2度目の人生 ―― 1
出会いは偶然、別れは必然 ―― 10
そこはもう一つの現実 ―― 18
第1層ボス戦 ～イルファング・ザ・コボルド・ロード～ ―― 26
現実世界では……― 37
信じるは己の技量のみ ―― 45
第74層ボス戦 ～ザ・グリーム・アイズ～ ―― 53
決闘 ―― 64
荒れる剣豪 ―― 73
第75層ボス戦 ～ザ・スカル・リーパー～ ―― 82
予定外の最終決戦 ―― 91
帰還 ―― 100
変わり果てた日常生活 ―― 107
心の支え ―― 117
事件の匂い、そして帰還 ―― 126
準備 ―― 133
合流 ―― 141
作戦会議、そして……― 150
グランドクエスト攻略 ―― 160
真の帰還 ―― 174
絶剣 ―― 188
縁の形 ―― 205

# 2度目の人生

縁とは何だろうか？辞書で調べたところ仏教用語で因果関係において、因を助成する間接的要因とある。ならばこの光景もまた縁というやつなのだろう。

「おはようございます」

「「おはよーございます！」」

死んだ筈の自分がこうして小学校と思われる場所で授業を受けていることも。

話は数年前に遡る。不慮の事故で確かに自分は死んだ。確か伝染病の類いだったか。薄れ行く意識の中一度で良いから恋というやつをしてみたいと思った。すると有り得ないことだが再び意識が戻った。幼子の体を従えて。確かに生前？はライトノベルとか言うものも少なからず読んでいたが、異世界転生というやつだろうか？だが見慣れた景色に聞きなれた言語は間違いなく生前と同じ日本である。ならば輪廻転生と言ったほうが良いか。何故か前世の記憶が残っているが、世界でも恵まれた国である日本に再び生を受けるとは有難い。ならばこの2度目の人生、大いに謳歌しようではないか！

「今日は入学式です！皆不安とかあると思うけど6年間一緒に頑張ろう！」

「「はーい！」」

ああ、私・・・僕？・・・・俺？・・・・一人称が安定しないな。俺、で行こう。転生して良かったと思えるのは考えに余裕ができること。同級生に何を言われてもカッとなる前に落ち着いて考える余裕がある。ああ、俺が前世で小学生のときにこれくらい余裕があればもっと楽しい、虐められることも無い小学校生活が送れたのだろうか？

入学式が終わり、教室に戻った我々に先生が言ったのは

「じゃあまずは自己紹介をしようか！自分の名前と好きなことを１つ言ってね」

そう、自己紹介は大事。なにせ自分の第一印象が決まる。周りに埋もれない個性を出しつつそれでいて引かれないような自己紹介をせねば。

それじゃあまずは・・・古原君！

俺の番は最初か・・・

「古原謙二です。好きな事は遊ぶことです。よろしくお願いします！」

よし、元気よく言い切った。生憎生前から運動の類いは不得手だからな。こういった男子は小学校では嫌われる傾向にあるがどうだ？

「じゃあ後で一緒に遊ぼう！」

おっ思ったより好感触だ。

「次は・・・紺野さん！」
「はいはーい！ボクの名前は紺野　木綿季！好きなことは体を動かすこと！よろしくね！」
おっボクっ子か、珍しいな。ん？
そこで俺は気が付く。周りの反応に
「女の子なのにボクだって。変なの」
「確かに変だよ」
あっ俺これ知ってる。このまま虐めに発展するやつだ。ちなみに経験談である。皆に異物と判断されること。これは虐めの入り口である。そして往々にして先生は何もしない。学校も何もしない。面倒だし、学校の名声が下がるからな。誰かが助けてやらないとこういう奴は孤立する。見た感じ陽気な子のようだ。ああいうのは陽気に振る舞って大抵全部自分で抱え込む。自分の世界が狭い小学生なら尚更だ。
「ほっとけないよな」
ワイワイガヤガヤ騒がしい教室で俺の声は誰にも届くことなく消えていった。この時はまだただのほっとけない子という認識だった。

それから2年が経った時だ。あのまま虐められるかと思っていた紺野さんだが持ち

前の明るさですっかりクラスの人気者だ。俺か？俺は・・・・

「おーい古原！サッカーしようぜ！」

「それは運動が苦手な俺に対する嫌味か!?」

やはり遊ぶ＝運動の小学生はキツいな。

「すまん。サッカーは苦手なんだ。パスで」

「じゃあグランドな！」

話を聞かんか話を、まあ小学生らしいっちゃ小学生らしいか。

「謙二もいつも大変だね！」

「ああ、まったくだ」

紺野さんからだけは謙二と呼ばれている。自己紹介の件の後孤立してた紺野さんに話しかけたところ仲良くなってしまってな。ちなみに俺と話をする紺野さんを見て女子が寄って来た。女子と話せるなんて前世じゃ考えられないことだな。前世と違い割と充実した学校生活を送っていた。とても幸せだった。そう。過去形になった。なってしまったのだ。

平穏が音を立てて崩れ去ったのは小学４年生のとき。だいぶ学校生活に慣れ、下級生も増えて本格的にお兄さん、お姉さんとして扱われる年齢だ。その夏休み明けに悲劇は

起こった。ある日教室に入ると黒板にデカデカとこう書かれていた。

紺野　木綿季は淫乱

誰が書いたのか下にはご丁寧に淫乱という言葉を辞書で引いた意味まで書いてある。皆に話を聞くと

誰かの親が紺野さんがＡＩＤＳ持ちだと知り、子供に漏らす

←

子供がＡＩＤＳとは何ぞやと調べる

←

ＡＩＤＳはＨな事をすると掛かる病気だと知る

←

イコール淫乱

だそうだ。全く馬鹿馬鹿しいにも程がある。大体まだ生理すら来てなさそうな少女が淫乱とは無理があろう。十中八九生まれつき。大方丁度俺が生まれた頃に流行った血液製剤からの感染だろうな。だが小学生にそんなことは関係ない。そして加減を知らない小学生の虐めはストレートな分下手な大人の虐めより堪える。因みに経験談で

ある。
「こいつは……不味いな」
　予想は的中した。その日から猛烈な虐めが始まったのだ。今まで仲が良かった筈の女子を含め、無視に始まり物を隠される。偶然を装って殴られる。だがそれでも陽気に振る舞う紺野さんを彼らは虐めが効いていないと判断。ますます苛烈になっていった。ある日の放課後耐えかねた俺は殴ろうとする男子の前に立ち
「いい加減にしろ！」
　今まで物静かだった俺が叫んだお陰で静まる教室
「一人の女子をよってたかって虐めるとは、恥を知れ！」
　しばらくすると復活した男子が
「何だよ古原！お前その病原菌の肩を持つのかよ！」
「ああ！そうだ！」
　予想外の返答だったのだろう。男子はポケーっとしていた。俺はすかさず
「お前は最初に何て言った？Ｈな事をしたからＡＩＤＳになった。つまり紺野さんは淫乱だと、そう言ったな！」
「ああ！それがどうした！」
　ああ、矛盾に気がつかない。小学生らしい

「おかしいと思わないのか？何でHしないと移らない病気がお前らに移るんだ？俺には理解出来ないな」
「そいつに移されるかも知れないだろ！現にそいつは感染してるんだ！」
「なあ知らないかもしれないが一応言うとだな、小学生位の子供じゃあ体が未発達だからHなことは出来ないんだぞ？」
「キスしたら！」
「キスで移るにはバケツ数杯分の唾液が必要だそうだが？」
「ぐ・・・それは・・・・」
「根拠の無い事で虐めるな！もし気に入らないなら確実なソースを持ってこい！筋の通った説明をしろ！更に言うと虐めは最低な人間のやることだ！弱者を虐める事でしか満たされないんだろうな！お前らは！」
「・・・・・ごちゃごちゃうるせんだよ！そんな奴とつるむお前も病原菌だ！」
「流石だな。言葉が通じない。論破されると逆ギレ。理性の欠片も無いな。俺は日本語で喋ったつもりなんだがな。母国語すら理解出来ないのなら動物園にでも帰るといい」
ドゴッ
次の瞬間俺は宙を舞った。どうやら殴られたらしい。
ドサッ

「うぐぅ・・・・・すぐに暴力に訴えるとは。下手なゴリラよりゴリラだな。その頭には脳みその代わりに筋肉でも詰まっているのか？」

ドガッ！

次は蹴られた。俺の体持つかな？子供の体は貧弱なんだぞぉ

「キモいんだよ。カス。死ねよ」

「ハッ、殺す覚悟も無いくせに良く言う。弱い犬ほど良く吠えるという言葉を知らんのか？それと体ばかりではなく少しは語彙力を鍛えたらどうだ？」

バギッ

次は顔面か、家族に隠すの苦労するから辞めてほしいが・・・・・

「へっ。女子を守った騎士様気取りのとこわりいがお前じゃあ誰も守れねえよ。口先だけのおめえがよ」

そう言うと彼らは去っていった。去り際に仲が良かった筈の女子から

「キモい。人前でHとか言うなんてデリカシー無いんだ」

そう言い残し、去る足音を聞きながら

ああ、友情とはこうも脆いものか。何も学んでなかったな。俺は、だが一人でも味方と思える人がいれば自殺という最悪のケースは免れるだろう。俺は何があろうと紺野さんの味方になってやる！

そう考えながら全身の痛みに耐えつつ痛みが引くのを待っていると

「先生！こっちです！」

聞きなれた声と共に走る足音。ああ、誰かが助けを呼んでくれたかと思いながら意識を手放した。

# 出会いは偶然、別れは必然

「んん？」

目を覚ました俺は保健室のベッドにいた。時計を見ればほんの数分しか経っていない。しかし生前もだが肉体労働は苦手だ。だから今の俺に出来るのは彼女に寄り添い、支えてやることくらいだ。お人好しだって？どうせ本来は無い筈の人生だ。好きに生きるさね。おや？

「良かった。割と早く目が覚めましたね」

「ああ、先生。ありがとうございます」

「お礼は紺野さんにしなさいね？あの子が呼ばなかったら多分あなたのお母さんも帰ってこないって大騒ぎだったはずよ？」

「そうだったんですか……あの…凄く痛いんですがどうなってました？」

「幸い骨とかに異常は無かった。でも傷が酷かったから暫くは痛むと思うよ。どうする？家族の人呼ぶ？」

「いや……つぅ……大丈夫です。歩けます」

「無理はしないでね？他人も大事だけど一番は自分の体よ？」

「はっ、一人の女の子を守れたんです。名誉の傷ですよ」
「今までも思ってたけど君ってやけに年食った中年みたいなこと言うよね？普通の男の子ならやられた相手に仕返しをまず考えるよ？」
「仕返しはいいです。やったって無駄ですから」
「そういうとこだよ・・・・・まあいい。なるべくここには世話にならないようにね？」
「善処します」

その日の夜、家に帰った俺は両親に根掘り葉掘り聞かれた。誰にやられた？どうしてこうなった？とね。でも、
「騒ぎ立てないで。骨には異常は無いし、ああいうのは学校側は何もしてくれないから」
こう言うと不承不承といった表情でそれ以上は聞かず一度は引いてくれた。だが、
「次は見過ごせない。次があったら学校に訴える」
顔が本気だった。まあ我が子がこんな目に遭えば普通の親はこういう反応をするだろうな。だが騒ぎになると不味い。下手すると全国区に紺野さんのＡＩＤＳが知れ渡る。それだけは絶対に防がなくては。未だにＡＩＤＳへの差別は根強いからな。部屋に戻った俺は宿題等をこなしつつ
「明日からは地獄だぞぉ。十中八九俺も虐めの対象になるだろうからな。まあ虐めの対

象が増えれば分散するからあれよりはマシか・・・・」
脳裏に浮かぶのは忘れたくても忘れられない生前やられた虐めの数々。なまじ俺一人がターゲットだったせいできつかった。無視や物を隠されるのは序の口。一番辛かったのは耐えかねて先生に直訴したとき。無表情で
「あれはおふざけ。何?そうやって自分だけが可哀想とでも思ってるの?そんなんだから虐められてるって勘違いするんだよ。迷惑だからもう来ないでね?」
あっ俺に味方なんていないんだって思った瞬間だった。そう、虐めで何が辛いって味方がいないと思うこと。俺はそれ以降極度のコミュ障になった。そのせいで出会いの出の字も無い人生だった。だからこそ
「精神的な年長者として彼女は救ってやらねばな。生憎ぼっちには慣れてる。はっ！人のためになるってのはこうも心が踊るのか。ボランティアとかで報酬は人々の笑顔って言い切る奴等の気持ちが分かるよ」
さて、寝るか。体力は温存しとかないと。家族には迷惑は掛けられないからな。

次の日から案の定俺の予想通りとなった。来る日も来る日も虐められる毎日。ただ紺野さんとはその分とても仲良くなり、登下校から給食まで一緒に過ごした。ある時
「ねえ。どうして謙二はボクの為にそこまでするの?ボクを庇ったせいで謙二まで虐め

られてるじゃん？」
「俺にも良くわからん。ただ一つ言えるのはほっとけなかったってことさ」
「……そうなんだ。ありがと」
珍しく元気の無い返事に
わしゃ
「そんな暗い顔せんでくれ。俺が進んでやったことだ。紺野さんに責任はないよ。な、元気出してくれ」
つい頭を撫でてしまった。キモいとか言われないかな？
「むぅ、分かったよ！ボクはいつでも元気なのが取り柄だからね！」
あら？悪く思われてはないらしいな。
パッ
「あ……」
なんでぇ!?なんで撫でるのやめただけでそんな捨てられた子犬のような目をする!?
「ん？どしたの？」
「なんかお父さんに撫でられてるみたいだった」
「それは俺が老けて見えるってことか!?」
「いやいやそうじゃないよ！なんか……こう……安心するというか……」

「……」

誰か教えてぇ！こういうとき何て返したらいいのぉ!?

「あはは！その…またいつか落ち込んだときは撫でてくれてもいいんだよ？」

「ああ、してほしかったら言ってくれ」

この話の後から割と頻繁になでなでをねだられた。そっか、思ったより溜め込んでたんやなって。少しは支えに…なれたかな？

始まりがあれば、終わりがある。雨にも負けず、風にも負けず、虐めにも負けず、そんな生活も永遠に続く事はなく

「もう、お別れか…」

「長いようで短かったな…」

「じゃあ、これからも頑張ってね！」

「それはこっちの台詞だ！」

卒業後は別々の中学に進むことになる。紺野さんは所謂特別支援学校というやつに行くらしい。まああそこなら理解もあるし虐められることも無いだろう。だいぶ俺に依存してる節があったが流石に健常者の俺は特別支援学校には行けないからな。これで一人立ちしてくれれば良いのだが……ん？いかんいかん。思考が父親みたいなこ

とになってた。さて、忌々しい学舎に別れを告げていざ、帰るとするか！因みに中学は前世の知識も総動員して私立に特待生で受かってやった。公立に行こうもんなら同じ学校だったやつらに虐められるからな。前は紺野さんがいたし耐えられたが一人じゃまず無理。親は学費が……とか言ってたけど特待生で学費免除を勝ち取ったら文句は言わなかった。さて、この卒業から入学までの空白の時間にあれをやるとするか……

家に帰り、飯を食べ、部屋に戻った俺の目の前には今まで見たことの無い頭をすっぽり包むヘッドセットがあった。ナーヴギアと呼ばれるこいつはゲームの世界に入れる夢のようなゲーム機だ。前世にこんなのは無かったからな。これだけでも転生できた甲斐があったというもの。さて、親にはちゃんと許可はとったしやるか！

「どれどれ？ソード・アート・オンライン？見た感じ剣で戦うＭＭＯＲＰＧといったところか。うむ！心が踊る！」

早速ベッドに横になり、有線のネットケーブルを繋ぎ、ナーヴギアを被っていざ行かん！電脳の世界へ！

リンクスタート！

そう言った瞬間だった。体がふわーっとして宇宙に漂ってるような（行ったこと無いけど）そんな感じ。暫くふわふわしていると

ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ＳＡＯ

というロゴが。なるほど、ソード・アート・オンラインの頭文字でＳＡＯか。何々？まずは名前の設定からか。ふむ・・・

小一時間程悩んだ末決めたプレイヤーネームは

［ＫＯＪＩＲＯ］

はい！そうですよ！大剣豪の佐々木小次郎から取りましたとも！だって？剣豪といったら日本人なら憧れるやん？あれっ？これで刀が無かったら最悪じゃ・・・・・

『ではプレイヤーメイキングを・・・・・』

まだあるの？

名前決めで疲れはてた俺は日本人っぽいアバターにした。よし！これで！

『では空飛ぶ鋼鉄の城、アインクラッドを心行くまで楽しんで下さい！』

そんなシステム音声と共に視界が真っ白に染まる。視界が戻るとそこは中世の町並

みだった。人々の喧騒を前にここがゲームの世界であることも忘れて見とれてしまった。

# そこはもう一つの現実

わいわいがやがや

「ハッ！」

見とれていた俺が再起動したのはそれからすぐのこと。飛んだり歩いてみたりして感じる。

「凄いな。最初のチュートリアルとかアイコンが無かったら現実と見分けがつかないぞ？」

一通り動きを確かめた俺はＲＰＧの鉄則である初期装備の確認をした。

「ん？右手の二本指で上から下へスクロール……うお!?」

シャラララーン

鈴の音が鳴ると目の前に半透明の画面が表示された。

「どれどれ……うむ！見事なまでの初期装備だな！まあ当然か」

防具は装備しておらず、武器も恐らく初期のものだろう。斧やら剣やらが入っていて……

「何？刀が……無いだと!?」

だが何処にも刀は無かった。
「仕方ない。この刀っぽい曲がった剣にしよう。ふむふむ曲刀というのか。では早速戦闘だ！早く戦って強くなってやる！」
意気揚々とフィールドに出た俺は
「おお！素晴らしい景色だ！所々にモンスターらしきがいる。なるほど。見た感じ他人との取り合いになりそうだな。早く来て正解だった」
まずは孤立している青い猪、フレンジーボアと言うらしいが、それに狙いを定めて・・・
「まあ待て、俺。一度落ち着くんだ。もしかしたらあれが初見殺しのモンスターかもしれない。警戒を怠るな！俺！」
というのもＳＡＯの情報が出た時にやりたい！と思った俺は取り敢えず色んなアクションＲＰＧゲームをやって予習をしたのさ。ＲＰＧゲームの基本は同じだから何か生かせると思ってね。しかしアクションＲＰＧとは鬼畜ゲーだと分かったよ。俺がやった○ークソウルとか○ラッドボーンは本当に初見殺しが多かった。お陰で何もかも疑ってかかる癖が付いてしまった。そのお陰で後半は死ぬことなくクリアできた訳だが・・・・・
「まずは近づいてモーション確認！ふんぬ！」

何度か避けるうちに気がついた。
「なるほど。攻撃は突進だけか。ならば！」
ブヒー！　スカッ
「避けて！」
ザシュ！
ピギー！
パリーン
「ほう、死んだらあんな風になるのか。死骸が残らないのは良いことだ。うむ」
その後は他人のを横取りしないように気を付けつつひたすらフレンジーボアとやらを狩り続けた。お陰でレベルは5になり、街に戻った俺は
「ステータス振りか・・・どうしようか。俊敏と攻撃を上げておこう。近距離戦では素早さが大事だ。筋力とかは装備が出来る最低限で良い」
俊敏と攻撃以外は満遍なくステータスを振り
「さて、一段落したしここいらで落ちるか」
メニューを開き、ログアウトボタンを押そうとして
「ん？無いぞ？あれっ？ログアウトが出来ない？どうなってる!?」
バグにしては致命的すぎるバグ。この仮想世界から出られないというのだ。

「こういうのは強制終了が……やり方知らねぇよ！」
どうやら他の人もそうらしい。ざわざわしているといきなり
ゴーン……ゴーン……
鐘の音が聞こえる。これは確かＧＭから何か重大な報告がある時にプレイヤーを一ヶ所に集めるときの音だったかな？やはりこれはバグか？

光に包まれ、気が付くとそこは街の中心にある噴水広場。見れば多くのプレイヤーでひしめき合っていた。中には
「どうなってる!?」
「さっさとＧＭ出てこい！」
「ちくわ大明神」
「「何それ？」」
一部訳の分からないことを言ってる人もいるが…おや？
転移の光が落ち着くと噴水の上になにやらドロッとした物が積み上がっていき、赤いローブの形になった。中に人はおらず、ローブだけだ。
『皆さん。私の世界にようこそ。私は茅場晶彦。この世界を作った者だ』
『既に多くのプレイヤーがログアウトボタンが無くなっていることに気が付いているだ

ろう』
『だが、これは不具合やバグではない。繰り返す、これは不具合やバグではない』
『これがソード・アート・オンラインの正式な姿である』
『これ以降君達はログアウトすることは出来ない』
『因みにもし、この世界でＨＰがゼロになるか現実世界でナーヴギアを強制的に外そうとした場合……』
　幾ばくかの間を置いて彼はこう言った
『ナーヴギアに搭載された高出力マイクロウェーブによって君達の脳は不可逆的に破壊される』
『これから逃れる方法はただ一つ。この鋼鉄の城の最上階。第１００層のボスを倒すのだ』
『因みに現実世界ではあらゆる方法でこのことを繰り返し報道している。間に合わなかった数名を除きこれ以降外部からの介入で現実世界と仮想世界の両方から永久にログアウトする心配は無くなった。心置きなく攻略に励んでくれたまえ』
『以上でソード・アート・オンラインの正式チュートリアルを終了する。また、君達のインベントリにささやかなプレゼントを用意した。使ってくれたまえ』
　途中叫んだ奴もいたが気にもせず最後まで言い切ったローブは消えた。俺は即座に

人混みを抜け、フィールドに飛び出した。というのも
「早く狩らないとモンスターが居なくなる！そうなったらレベリング出来なくなる！」
死んだら終わり？死ななきゃいいのさ。そう考えながら俺は黙々とフレンジーボア狩りに勤しんだ。因みにプレゼントされた手鏡とやらは捨てた。運営がくれるものは大抵役に立たないクソアイテムと相場が決まってるからな。インベントリの邪魔になる。
「ふん！しかし人が増えてきたな？しかしなんだ？彼らは剣が青く光ると凄い勢いでフレンジーボアを倒している。急所に当てなくても倒れるとは・・・・必殺技か何かか？」
近くにいた幼さの残る若い男性プレイヤーに聞いてみると
「お前ソードスキルを知らないのか？」
「うむ、知らん」
「チュートリアルで説明があったはずなんだが・・・・ソードスキルって言うのはな・・・・」
どうやら構えを取ると勝手に剣が振れるらしい。試して見たが剣が青く光ると勝手に体が動きそうになって
「気持ち悪い！」
思わず剣を手放した。まるで自分の体じゃ無くなるような・・・・そんな感じだ
「うーん。でもソードスキルが使えないとこの先戦えないぞ？」

「いらん！見れば振り切った後少し硬直しているではないか！あんなものリスクがデカ過ぎる！信じるは己の技量のみよ！急所に当てれば敵は倒せる！」
「まあ人それぞれだが無理するなよ？」
「ああ、教導感謝する。名前はなんと言う？私は小次郎だ」
「あのーだな・・・アイコンの上に名前が表示されているんだが・・・・」
「あっ」
　恥ずかし！書いてあんじゃん！どれどれ、なるほど。
「ふむ、キリトというのか。よろしく頼む。もし良ければフレンドになってくれないか？」
「ああ、構わない」
　フレンドリストにキリトという名前が追加された。個人チャットもあるらしく便利だな。これ
「では私はこれで。またいつか会おう」
「じゃあな！小次郎！」
　キリトと別れた俺は人が少ない森へと向かった。聞いた話によると安全マージンとか言うものがあるらしく、階層に１０上乗せした数値がそうらしい。ならば取り敢えず１２レベを目指そう。まずは・・・・

キシャーー!

「こいつらを皆殺しだ。経験値置いてけぇぇぇぇぇ!!」

俺は初期装備の曲刀が壊れるまで狩りを続けた。まあ本当に壊れる前に撤退したんだがな。街に戻った俺はドロップ品を売り、他のいらない武器も売り、新しい曲刀を買った。一本壊れそうになったら撤退して街で補給兼休憩。戦いっぱなしは効率が落ちるからな。暫くはこのスタイルでレベリングをしていこう。

# 第1層ボス戦　～イルファング・ザ・コボルド・ロード～

暫く森へ行く、戦う、武器が壊れる、街に戻って装備補給兼休憩。このサイクルを続けていると気が付いた。

「明らかにレベリング効率が落ちている。最初と比べて入手できる経験値が半分以下になってしまった。次の狩場に行くか」

次に向かったのは始まりの街の次の街であるトールバーナの側。新しい場所ということもあってかなりレベリングが捗った。レベルが目標である１２に達して一息ついていると。

ピコン！

「む？キリトからか」

キリトからのメッセージには

『第１層のボスモンスター討伐会議が行われる。もし参加するならトールバーナに来てくれ』

「ほほう。遂にか」

トールバーナ噴水前

「どーも！今日はボスモンスター討伐のために集まってくれてありがとう！俺はディアベル。職業は気持ち的にナイトやってます！」

「そんな職業ねえよｗ」

「いいぞー。かっこいいぞー」

凄いな。あれがカリスマというやつか？皆聞き入ってる

「さて、早速本題に入ろう。このゲームがデスゲームとなって暫く経った。このまま引きこもってても何も起こらない。そこで！第１層のボスモンスターを皆の力をあわせて討伐しようと思う。ここにガイドブックがある。これによればボスモンスター、イルファング・ザ・コボルド・ロードは手下を召喚するらしい。ボスモンスターと雑魚で……」

「ちょい待ってんか！」

説明をするディアベルを遮るようにイガイガ頭の男性プレイヤーが飛び出してきた。

「どうしたんだい？えっと…」

凄い。遮られても怒らないとは…

「ワイはキバオウっちゅうもんや。こんなかに何人かワイらにワビ入れなならん奴がおるはずや！」

「詫びをしないといけない人というのは？」
「ベータテスター共や！あいつらが狩場とかの情報を独占したせいで大勢が死んだんや！今すぐここにベータテスター共が溜め込んだコルやアイテムを全部吐き出させて全員に詫び入れにゃ協力なんざできん！」
「つまり君はベータテスターの独占のせいで大勢が死んだと。だからここで謝れと。そう言っているんだね？」
「あ、ああ、そうや！」
　険悪な雰囲気になる会議。しかしなんだ、馬鹿なことを言う奴がいるものだ。死ぬ、死なないは自己責任だろうに。実際俺はベータテスターでも何でもないが生き残ってるぞ？
「発言良いか？」
「なんや！」
　そう言って出てきたのはとてもガタイが良い色黒の男性。スキンヘッドが良く似合っている。
「このガイドブック、知ってるよな？」
「始まりの街で配られたやつやろ!?それがどした!?」
　おい、俺は貰ってないぞ？というかディアベルが持ってるあれ配布だったのか？今に

なるまで存在すら知らなかったんだが・・・・
「こいつはな、ベータテスターが作った物だ。こいつにはしっかりと戦い方や心得なんかが載ってる。ベータテスターのせいで大勢が死んだというのはおかしくないか？」
「うんぐぐぐぐぐぅ。ええわ！今回は引いたる。せやけどワイは認めんからな！」
そう言ってドカドカと足音を立てながら元の場所に戻るキバオウ。ああいうのがチームの和を乱すんだよな。
「すまない。時間を取ってしまった。続きだが、ボスを叩くチームと雑魚を押さえるチームに分けようと思う。各自２～４人のペアを作ってくれ」
ふむ・・・・・各自でペアを作れと・・・・コミュ障にはキツいっす！
「なあ、小次郎」
「ん？おお、キリトではないか。どうした？」
「俺も一人でな。良ければペアを組まないか？」
「心得た」
「良かった。ありがとう」
「あの・・・・・私も入れてくれない？」
「ん？いいぞ。小次郎もいいよな？」
「かまわない」

声を掛けてきたのはフードを被って顔が良く見えない、声的に珍しい女性プレイヤーか。

「えっと・・・名前は？」

「アイコンの上に・・・」

うむ、この人も初心者だ。間違いない。

その後はスイッチを知らない俺と女性、アスナさんとでパーティプレイのいろはをキリトに教えてもらったり、風呂つきの宿に泊まっているというキリトをアスナさんと一緒におｄ・・・説得して場所を教えてもらったりした。

次の日

俺達は第１層のボス部屋の前に集まっていた。先頭に立つディアベルが

「俺から言うことは一つだけ。皆・・・・・勝とうぜ！」

「「「おう！」」」

ギィィィィィィ

扉が開くとそこには巨大なコボルトの王様、イルファング・ザ・コボルド・ロードがいた。奴は俺たちを見るなり

グォォォォォ!!!

叫んだ。すると回りに大量のコボルトが出現する。
「作戦通りだ！雑魚狩り組とボス組に別れろ！」
さて、行くか
ギャァギャァ
襲いかかってくるコボルド・センチネルをキリトとアスナさんとで狩る。二人のソードスキルの硬直時間は俺が補う。案外バランスのいいパーティだな。
「しかし！お前は！すげえな！ソードスキル無しで！戦えるなんてな！」
「喋りながら戦うか。器用だな」
「二人とも真面目にやって！」
「はい！」
俺達の仕事が忙しいということはそれだけヘイトが分散しており、それはボスに効果的にダメージが与えられていることを示している。みるみるうちにボスのＨＰゲージは削られていき……最後の一本になった。コボルド・ロードは持っていた武器を放り投げると腰に刺してある別の武器を手に取る。その時
「俺が決める！」
ディアベルが飛び出した。おいおい、最後まで気を抜いちゃいけないぞ？単機で飛び出すとは、死にたいのか？

グオオオオオ！

振りかざされたのは片刃の剣。光っているのを見るにソードスキルか。避ければ隙が出来るがあの様子じゃダメそうだな。そして大抵こういった追い詰められた敵の攻撃は痛い。

コボルド・ロードは空中にジャンプした。すると

「全力で後ろに飛べぇぇぇぇぇ!!」

キリトが叫ぶ。だが飛び出したディアベルは止まれない。

「まったく、面倒な。おい！キリトにアスナさん！少し抜ける！」

俺はある程度雑魚が減ったのでキリトとアスナさんに任せるとコボルトロードに向かって

「ぶっ飛べ！」

持っていた曲刀を思いっきり投げつけた。投げた曲刀はスキル発動中のコボルド・ロードの刀身に当たり、僅かに軌道が逸れた。そのお陰で

グハッ！

四連撃の攻撃の全てが掠るだけに終わる。だが、それでもディアベルのＨＰはミリ残りになっていた。吹っ飛んだディアベルに駆け寄りポーションを飲ませながら

「何をやっている！ディアベル！単身で突撃などとは、死にたいのか！」

「……ああ、すまない。欲が出たんだ」
「欲？何のだ？」
「知らないのか？ボスはラストアタックボーナスというのがあって最後の一撃を加えた者にボーナスがあるんだ」
「だがそれで死んでは元も子も無いだろう！」
「…本当に、すまない」
「謝るのは後にしろ！戦えずとも指揮は取れよう？」
「だな、ありがとう」
　そして起き上がったディアベルは
「俺は無事だ！敵はガイドブックと違う動きをしている！恐らくベータテスト時と違うのだろう！気を付けて戦え！」
　あの様子ならもう大丈夫だろう。そう思いながら俺は
「すまないキリトにアスナさん。今戻った」
「ナイスプレーだ小次郎！」
「ありがとう」
　それから数分後
　パシャーーーン

弾けるポリゴンと共にコボルドの王は消滅した。犠牲者は一人もいない完全勝利（約1名死にかけたが）であった。だがここに水を指す者がいる

「なんでや！」

イガイガ頭のキバオウである。

「何でディアベルはんを見殺しにしかけたんや！お前や！小次郎！」

んんー？あれれぇおっかしいぞぉ？なぜ俺がそんなことを言われないといけない？

「すまん。理解が追い付かないんだが、それはどう言うことかな？キバオウ」

「しらばっくれんなや！あんたは武器を敵の武器に当ててディアベルはんを助けた。せやけどそれはおどれがボスのモーション知ってたんやないんか？だったら何でディアベルはんに先に言わんかった!?」

「つまり？私が前もって知っていたであろうボスの攻撃を前もって伝えなかったからディアベルが要らぬ怪我をしたと、そういうことか？」

「ああ！そうや！」

「ンフ、フハハハハハハハ！」

駄目だ。笑いを抑えられん。

「なんや！何がおかしい！」

「いやはや、なに、ベータテスターでは無いばかりかガイドブックとやらも読んでいない

この私にそのようなことを言うとは、ハハッ、笑わずにいられようか？」
「どこにお前がベータテスターやないっちゅう証拠があるんや？」
「逆にキバオウ。そなたは私がベータテスターであるという証拠はあるのか？因にだが振り上げた物は振り下ろされる。その理論でいけば敵の武器に武器をぶつけるなど造作もないこと」
「でたらめ言うなや！あんなこと普通の人間に出来るわけ無いやろ!?」
「待て！キバオウ！彼は俺を・・・」
「ディアベルはんは黙っといてな！」
　ふむ、聞く耳を持たないか、どうにもならんな。ならここで嫌われ役をかって出るのも一興か。やれやれ、現実世界だけでなく仮想世界でも嫌われ役か。俺らしいな。
「ふむ、ならば隠してもしょうがない・・・か。ああ、そうとも。私はベータテスターだ。最も他の運で勝ち取ったベータテスターと同じにされては困る。常に私は最前線で剣を振るっていた。勿論大抵の敵のモーションは覚えている」
　おや？ディアベルやキリトを含む何人かの目付きが違うな。さしずめ本物のベータテスターか、本物のベータテスターには私が偽のベータテスターだとバレているだろうが私の考えを読んでくれてか何も言わない。とても有難いな。
「何や、それ。そんなんチートやチーターや」

それを聞いた他の者が
「ベータテスターのチーター、ビーターだ！」
「ふむ、ベーターか、なかなかどうして、悪くない。ならばこれからはベーターと名乗ろうか」
俺は憎しみの目を持つプレイヤーに背を向けると
「ああそうだ、次の層のアクティベートを済ませておいてやろう。死にたい者や腕に自信のある者のみ来るがいい」
俺は罵声を浴びせられながら俺は２層への門をくぐる。
「まあ１０層も攻略が進めば馬鹿らしくなってベータテスターへの風当たりも収まるだろう。それまでの辛抱だ。それよりも楽しみだな。第２層」
光に包まれながら俺は次の層への胸の高鳴りを感じていた。

# 現実世界では・・・・・

ある日のこと。古原謙二が入院している病院に一人の女の子がお見舞いに訪れていた。

「ねえ、いつになったら目を覚ますのさ。謙二。ボク寂しいんだよ?」

だが当の本人は身動き一つしない。ナーヴギアの作動中ランプが光っている事だけが彼が生きている事を示している。

「ボクびっくりしたんだよ?久々に声を聞こうと家に電話したらＳＡＯ事件に巻き込まれてるって言うんだからさ」

電話口で彼の両親に謙二がＳＡＯ事件に巻き込まれたと知るや否やどこに入院しているのかを聞いた。幸い小学校時代に仲が良かった事を知っていたらしくすんなり教えてくれた。

「多分気がついて無いんだろうけどボクは謙二無しじゃ生きられないんだよ。謙二のいない世界は寂しいんだよ」

「確かにあそこは理解があって過ごしやすいけど、それだけ。虐められてても謙二と過ごした小学校生活の方が充実してた」

特別支援学校

「多分これって恋ってやつなのかな？謙二が無事に帰ってきてもこの気持ちが無くなってなかったなら告白・・・してみようかな？ははっ聞こえてないから言えることだけどね」
「いつまでも待つからさ、無事に帰ってきてよね？もしかしたら学力的にボクがお姉ちゃんになっちゃったりして」
　眠ってる謙二に話しかけていると不意に病室のドアが開いた。そこには彼の両親がいた。
「また来てくれたんですね。紺野さん」
「あっ、こんにちは！」
　こうして会うのも何度目かな？学校が休みの日に来るから割とよく会うんだよね。
「こう頻繁にお見舞いに来てくれるとは、親としても有難いです。この子は何も言ってませんでしたが・・・その、虐められてたんでしょう？小学校で」
「・・・・・はい。謙二がボクを庇って・・・・」
「そうでしたか。親としても謙二は何を考えているのか分からないんですよ」
「え？」
「生まれた頃からそうでした。録に泣くこともなく、とても楽でしたが今思えば不気味でした。だって子供なのに今まで我が儘の一つも無かったんですよ？それにあまり勉

強をしている風では無いのにテストの点は良くて・・・・」
「確かに謙二はとっても頭が良かったです。ボクも何度か勉強を教えてもらってました」
「挙げ句の果てに怪我して帰ってきて問いただしたら「放っといてくれ。どうせ学校は何もしてくれない」ですよ?」
「聞いた限りだとあまり謙二に良い印象は無いみたいだけど、じゃあ何でわざわざお見舞いに来るんですか?それも二人揃って」
「それは・・・・やっぱり親だから。親っていうのは子供の唯一の理解者であるべきだと思うんです。どんなに不気味でも、確かに家の子であるならばちゃんと向き合ってあげないと。でなきゃ誰が子供の味方になるんです?」
　その時思わず俯いた。だってボクには・・・・
「そう・・・・なんだ。なんだか羨ましいな。謙二は」
「それはどういう?」
　ボクは一瞬戸惑った。この事は謙二にも言ってないから
「あっ、その・・・・」
　言いにくそうにするボクに気が付いたらしく
「言いにくかったら言わなくて良いから」

でも、いつかは知られること。隠し続けるのも嘘をついてるみたいで嫌だし…言っちゃおっか。

ボクは全部話した。自分のこと、家族が皆死んじゃって一人ぼっちだってこと、親族をたらい回しにされて形式上の親なら居ること、言いながら泣いちゃった。ボクの中では受け入れたつもりだったのにな……

ポンッ

気が付くと撫でられてた。見れば謙二の両親も泣いていた。

ひとしきり泣いて落ち着くと

「その…なんだ。紺野さんは今の生活に満足していますか?」

「正直に言うと……全然。お金はくれるし、住む場所もあるけど今の親はボクにそれ以上のことはしてくれない。多分関わりたく無いんだと思う。じゃなきゃこの歳で独り暮らしなんてさせないよ!」

「これは提案なんだが…家で一緒に暮らす気はないかな?何、一人子供が増えたところで問題無い。戸籍とかもこっちで何とかしよう。聞いた限りだとすんなり行きそうだ」

とても魅力的な提案だった。でも…

「どうして、どうしてボクにそこまでしてくれるんですか?だってボクは・・・」
「ハハッ、ついさっき聞いたとも。ＡＩＤＳだったかな?」
「・・・はい・・・」
「実を言うとだな。最初から知っていたんだ。いやなに親の付き合いというもので知ったんだがね、知った時は謙二に言ったとも。そんな子とは仲良くなるな、とね」
「えっ・・・」
「そんな顔をしないでくれ。それを言ったら謙二凄く怒ってね。次の日に大量の資料と共にＡＩＤＳのなんたるかを懇切丁寧に説明してきたんだ。流石にＷＨＯとかの資料を出されては納得せざるを得なかった」
「それで・・・」
「ああ、それとな、謙二も卒業の後結構寂しがってたんだ。普段どんなに一人でも寂しがらなかった謙二がだ」
「そうだったんだ」
「それとね・・・」
今まで黙ってた謙二のお母さんが口を開いた
「謙二を見るあなたの顔、恋する乙女の顔ね」
「なっ!!!!!」

思わず顔が真っ赤になる。自分でも分かる。
「家で過ごせばいつかＳＡＯ事件が終わった後、好きなだけ一緒に過ごせるわよ？学校が違ってもね」
「ううう」
最早隠せないし、自覚してしまった。ああ、ボクって謙二に恋してたんだ。なんか助けられて恋に落ちるってチョロいなぁボクって。
「で、」
再び謙二のお父さんが口を開く
「どうかね？」
返事は決まってた。
「ボク・・・一緒に暮らしたいです！」
その瞬間謙二の両親の顔がほころんだ。と、同時に
「よし！そうと決まれば善は急げだ！すまないが紺野さん。あなたの今の親はどこに居るのかね？」
「一体何をするつもりなんですか？」
「何、今のご両親に話を着けてくるのさ。養子縁組といってね、まあ簡単な話家の家族になるために必要なことさ。あっ、血の繋がりが無ければ養子縁組でも結婚出来るぞ？」

「そこまで!?」
「お互いが良いなら止めはせんよ。不安なら好きな男の一人くらい落としてみなさい。因みに私は妻に落とされた。学生時代から追っかけられてな。まさか職場まで来るとは思わなんだ」
「えっ?」
　振り向けばニコニコとしている謙二のお母さん。だが目が笑っていない。
「何か言ったかしら?」ニコォ
「いえ!何も言っておりません!」
　あっ、この人所謂嫁の尻に敷かれてるってやつだ。
「ゴホン!それは置いといてだ。私としては謙二が唯一友達の話をするのが紺野さんなんだ。他人よりは難易度は低いぞ?頑張りなさい」
「はい!」

　それから一ヶ月後、話はすんなり行ったらしくボクは古原家の一員となった。ボクの親と話した直後の謙二の・・・いや、もうボクのお父さんか。お父さんは阿修羅のような顔をしていた。どうやらあっさりボクを手放したことに怒り心頭だったらしい。ボクとしては予想通りだったからどうってこと無いんだけどね。ああ、これからの生活が楽

しみだなぁ！謙二、無事に帰ってきたら驚くだろうなぁ。ふふっ

# 信じるは己の技量のみ

馬鹿みたいに曲刀を振り回してレベリングしていたある日のこと。ステータスに見慣れないスキルが追加されていた。その名も刀スキル。これに狂喜乱舞した俺だがこれがとんでもないスキルだった。

「うーむ、悩ましい」

それは扱い手によって最強にも最弱にもなるスキルだった。

「これは・・・鍛練が必要だな」

その日から街の練習場に籠る小次郎の姿が目撃された。一応攻略組として名の知れた小次郎は何やってるんだと言われるも一切気にせず鍛練に励んだ。遥か彼方の剣豪を目指して。

そもそもなぜ小次郎がここまで鍛練に励むかというとソードスキルを使いたくないがためである。刀の欠点、それはきちんした振りで綺麗な太刀筋でないとダメージがほとんど入らないという点である。普通ならばソードスキルを使うことで鍛練をせずとも戦えるがソードスキルを使いたくない小次郎が選んだのはひたすらに鍛練である。

これの面白いのは
「ふん！」
　ズパッ
「うーむ、カスダメか・・・・」
　またある時は
「ふん！」
　シュパン！
「うお！凄まじいダメージ！一体今までと何が違うんだ？」
　だが、それでも、少しずつ、確実にカスダメは減り、小次郎は刀をモノにしていった。腹が減っても休まず、ＨＰが減らず、武器の耐久も減らない圏内なのを良いことに倒れるまで刀を振り、目覚めたらまた刀を振る・・・・・・・・

「ふむ、この辺りが頃合いか」
　ようやく刀をモノにした小次郎。ソードスキル無しでカスダメがほぼ出なくなるまでに達した。だが犠牲になった物も多かった。
「今は・・・・・何時だ？」
　狂いに狂った時間感覚、小次郎が籠り始めたのが第７層が攻略された頃合いである。

「取り敢えずは武器の新調だな。流石に最底辺グレードの刀では示しがつかん」
困った小次郎は随分前にフレンドになった情報屋を頼ることにした。鼠のアルゴである。
『なあ、漸く鍛練が終わったのだがどこか良い武器屋を知らないか？刀を新調したい』
返信はすぐに来た。だがそれを見た小次郎は腰を抜かす事になる。
『オメー今までどこで何やってたんダ!?まさか最後に会った時からずっと刀の鍛練してたとか言わないよナ!?』
アルゴのメッセージからは怒りがひしひしと伝わってきた。だがまだ終わらない。
『一時期は死亡説も出てたんだゾ!?直に会いに来イ！ついでにどれだけ自分がヤバいことをしてたか自覚しロ！』
添付されてたのはとある街、だが・・・・
「第５０層・・・・・だと？」
小次郎は気がつけば第７層解放から第５０層解放までひたすらに鍛練に励んでいたのだ。まさしく浦島太郎状態である。
「うーむ、この格好だとニュービーと思われそうだが・・・・致し方無いか」

## 第５０層

「で、あのときから休まずずっと鍛練してたと？」
「ハイ、ソウデス」
　アルゴからは怒りのオーラが感じられる。そばを歩く者が避けるほどだ。
「まあ、生きてたならいいカ」
　切り替えが早いアルゴは既に営業モードに移っていた。
「で？武器の新調だったカ？オメーレベルはどうなんダ？」
「一つも上がっておらん！２０で止まっておる！何せ鍛練に励んだ場所は圏内だ。レベルが上がる筈もなかろう？」
「自信満々に言うナ！ならステータスも足りねーナ。取り敢えずは６０レベまで上げて来イ。そしたらここに行ケ。いい武器を取り扱ってるゾ」
　紹介された武器屋はリズベット武具店と言うらしい。なんとＮＰＣではなくプレイヤーメイドの武具店だと言うから驚きだ。
「じゃあナ。次からは毎日とは言わねえが生存報告位しろヨ？」
「心得た」

　あれから数日。驚異のスピードでレベリングを済ませた小次郎。休まない事には慣れている上、５０層のモンスター相手には最底辺グレードの刀でもクリティカルが出れ

ば割と戦えたのだ。もっとも雑魚一匹倒すのに数十分かかったが……何本も武器を買い換えて漸く目標である６０レベに達した小次郎は意気揚々と紹介された武具店に赴いた。

ガチャリ

「いらっしゃいませー！リズベット武具店にようこそ！どのようなご用件ですか？」

明るい笑顔で出迎えたのはリズベットというプレイヤー。置いてある武器を見るに相当の実力者らしい。

「新しい武器と防具が欲しい。刀と動きやすい装備を頼む」

「あー、刀使いの方でしたかー。こんなのはどうでしょう？」

渡された一振りの刀。軽く素振りをしてみると

「うーむ、手前が軽いな。ん？どうした？」

驚きの表情のリズベット

「凄い、刀ちゃんと扱えるんですか？」

「ある程度は扱えるぞ？我流だがな。どこか変だったか？」

「いえ、ただ刀使いのほぼ全員がソードスキル任せで本人はあまり綺麗な太刀筋とは言えないので……」

「ほう」

「もしかしたらあなたなら補正無しの純粋な刀が作れるかも！」
「おい待て。補正とはなんだ？」
「えっ、刀使いなのに補正を知らないんですか？刀に付与されてる剣筋補正です。これで多少はソードスキル無しでも戦えるというものです。その分他のステータスが犠牲になりますが」
「そんなものはいらん。鍛練のお陰でほぼクリティカルが出る状態だからな」
「凄い！信じられない……これは腕が鳴るぞぉ！出来上がったら連絡するので連絡先を下さい」
「請け負った」

それから数週間後、小次郎は今までの分を取り返すかのように休んだ。といっても風呂に入って寝てただけである。しかし第７層から寝ずに鍛練に励み、それから寝ずにレベリングをしたお陰で精神的に疲れたのだ。そうこうしているとリズベットから完成したという連絡が入った。

リズベット武具店
「これがあなたの装備です！」

目の下にくまを浮かべたリズベットがそう言った。
「おい、大丈夫か？」
「ここは仮想世界。数週間寝なくても死にゃせん！」
「まあ、そうだな」
口が裂けてもそれ以上寝ずにやったとは言えない。
「おお、これは凄い」
そこにあったのは袴と２ｍ近い大太刀であった。
「この大太刀は？」
「よくぞ聞いてくれました！それは物干し竿という名前の刀で見ての通りとても長いです。型が無いあなたにはリーチがあって良いでしょう？上手く扱ってください」
試しに振るととても手に馴染む。長いのに易々と振り回す小次郎を見て
「刀に振り回されずちゃんと振れてる。私の目に狂いは無かった！」
「これはとてもいいな。どれ、装備の方は……」
一式を着込むとそこには一人の侍がいた。薄紫の陣羽織に袴、長すぎて腰には差せない物干し竿は背中に装備した。
「素晴らしい。動きやすく、袴のお陰で足裁きを見られにくい。良いものだ。で、値段はいくらかな？」

リズベットは微笑んで
「いらないわ！私の持てる全てを詰め込んだ逸品よ。今後のメンテナンスと少しの広報活動をしてくれたらいいわ！」
「恩に着る。約束は果たそう」
このあとリズベット武具店を訪れる客が倍近く増えたという。誰しもカッコいい侍には憧れるものだ。

# 第７４層ボス戦　～ザ・グリーム・アイズ～

武具を新調した小次郎は今までの不在を取り返すかのように最前線で活躍した。ソードスキルを一切使わずボスを倒す姿は誰もが憧れ、多くの人がが目指し、その全員が挫折した。小次郎の剣技はとにかく切りつけるときに刃先を正す。ただそれだけのため構えと言うものも無かった。いつしか小次郎は侍という二つ名が付くようになる。

ある日のこと、小次郎は鍛練兼レベリングの為迷宮区に来ていた。小次郎は常に最前線のフィールドで鍛練に励んでいる。

「ふむ、だいぶ安定したな。これなら必殺技に手を出してもいいかもしれん」

今小次郎が励んでいるのは所謂必殺技というもの。ただがむしゃらに敵を切るのでは味気ないと考えたのだ。

「私が目指す佐々木小次郎には燕返しという技があったな。確か・・・切りつけてそのまま切り上げる技だったか・・・・・セイッ！」

そこら辺にいたスケルトンに考え付くそのままの燕返しを放ってみる。

シュパッザシュッ！

倒しきれずに思わず下がる

「駄目だな。返す刀では火力が全く出ない。何か別のを考えなくては……」

とにかく切りまくった。

回転しながら切る……目が回った。

突いてみる……ダメが全く入らない。

「２連撃では不足か？」

上、下、上と切りつける……ただのいつもの攻撃だ。だが、モンスターは倒せる。

「火力的には３連撃が理想か」

それからは振り方の研究だ。小さくて素早いモンスターを相手に研究する

「確実に仕留められないと必殺技とは言えない。火力は足りてるからどう振れば確実に当たるのか……」

考える。左右から切る、上下に避けられる。上下に切る、左右に避けられる。そしてたどり着いたのが…

「左下！上！右下！」

左下から振り上げ、上から切り降ろし、そのまま右下から切り上げる。上下左右どこに逃げられても当たる軌道である。

「うむ、これならどんな敵でも当たるな。後はいかに素早く３連撃を叩き込むか、今はま

だ……」

シュパシュパシュパン！

「まだ遅いな。これではいけない。それこそ必殺技と呼ぶには3連撃ではなく同時に当たる位で無ければ…」

その日から再び小次郎は前線から姿を消した。

第７４層迷宮区

「ふう、漸くマッピングが終わったな。しかし小次郎のやつ。またどっか行きやがって」

迷宮区のセーフゾーンで愚痴るキリトがいた。というのも５５層のボスを倒したところで再び姿を消したのだ。

「またどうせどっかで鍛練してんだろうなぁ。前あいつに聞いたら「クリアより剣を磨くのが最優先だ」とか言ってたからなぁ。てか十分強いだろあいつ。何でソードスキル無しでしかも刀で前線で戦えてるんだ？ベータテスターじゃないのに……」

「あいつは全刀使いの憧れだ。それくらい当然だな！」

赤い着物に刀を差すクラインがそう言った。そして、

「多分想像を越える鍛練の結果なんだろうね。キリト君」

横に座るアスナが答える。なんやかんやあってキリトはアスナと行動を共にしてい

た。クラインは腐れ縁である。すると
「呼んだかな？以外と評価が高くて嬉しいぞ？キリトよ。そしてクライン、私には憧れるな。私はただの棒振りだ」
「どわぁぁぁぁぁぁ!!!!」
　ビックリして飛び上がるキリト
「お前ビビったぞ!?後ろに立つなよ！」
「はっはッは、これは失敬」
「てか今まで何やってたんだ？鍛練か？」
「ご名答」
「やっぱりか！」
「相変わらずだね、小次郎君は」
「流石は小次郎様！気配を消すなんて訳ねえぜ！」
　久々に出会った四人はセーフゾーンということもあり暫く談笑に耽っていた。すると・・・・
　ザッザッザ
　統制の取れた足音が聞こえた。
「ふむ、６人か」

「お前人間やめてないか？何で足音で人数が分かるんだ？」
「いやなに鍛練の時に複数の人型モンスターを相手取っていたら自然とな」
暫くして足音の正体が見えた。同じ甲冑を纏った6人組である。その先頭にいた一際目立つエンブレムが刻まれた男が
「休憩！」
後ろの5人が疲れを隠しきれない顔でへたりこむ。命令を出した男はキリトの元へ向かうと
「私はアインクラッド解放軍、コーバッツ大佐である！貴様らはこの先のマッピングは終わっているか!?」
「ああ、終わってるが？」
「ならば我々にそのマッピングデータを提供してもらおう！」
随分と高圧的な態度である。思わずキリトが
「お前マッピングの苦労知ってるのか!?それに人に頼む態度ってもんが……」
「アインクラッドの攻略は全プレイヤーの悲願である！故に貴様ら一般プレイヤーが我々アインクラッド解放軍に情報提供するのは当然の義務である！」
開いた口が塞がらないとはこの事。すると、
「まあまあ良いではないかキリトよ。あー、コルベット大佐とか言ったかな？」

「コーバッツだ！」
「そうそうコンバット大佐よ。私はマッピングが終わっている。ほれ」
　小次郎はあっさりマッピングデータを手渡す。すると
「私の名はコーバッツだと・・・まあ良い。情報提供感謝する！立て！休憩終わり！」
　ノロノロ立ち上がる部下を立たせるコーバッツ。思わずキリトが
「おい、お前の部下だいぶ消耗してないか？そのままだと死ぬぞ？」
「私の部下はそんなに軟弱では無い！前進、前へ！」
　部下という言葉をやたらと強調してコーバッツは部下を従えて去っていった。それを見送ったキリトは
「おい、なんでデータを渡した？」
「なに、減るものではないだろう？それにあの様子ではそのまま考えなしにボスに挑むであろう。いい偵察役になる」
「だといいが、あの様子じゃ多分死ぬまで戦うぞ？」
　すると奥の方から
うわぁぁぁぁぁぁ!!!!
　悲鳴が聞こえた。
「行くぞ！」

キリトの呼び掛けに頷く三人、俊敏さを遺憾なく発揮してボス部屋に急いだ。

第７４層ボス部屋

グオオオオ！

部屋には青い体をした角が生えてデカイ両手剣を持った悪魔と座り込んで動けない軍のメンバーがいた。

「おい！早く脱出しろ！」

「駄目だ！結晶が使えない！」

キリトの呼び掛けに悲壮な声で答える軍のメンバー。すると

「何をやっている！立て！我々アインクラッド解放軍に退却の文字は無い！全員！攻撃陣形！」

コーバッツの号令で横一列に並ぶ軍、それを見た小次郎は

「愚かな・・・・」

案の定ブレスで凪ぎ払われる軍。そして悪魔の振り上げた両手剣の餌食になったのは

ドサッ

コーバッツだった。誰よりも勇敢に立ち向かった彼は敵の攻撃をモロに食らって吹

き飛ばされた。そして皆の目の前で
「あ・・・あり、え、無い」
　パシャァァァァン
　やけに響くポリゴンが壊れる音、すると
「駄目ぇぇぇぇぇぇ!!!」
　堪えられなかったのだろう。アスナが飛び出した。
「あぁ!もうどうにでもなりやがれ!」
　それにクラインが続く
「致し方無いか、行くぞキリト」
「応!」

　突入した四人はアスナとクラインが軍の救出、キリトと小次郎がボスの対処をしていた。だが、
「早くしてくれ!二人じゃ持たない!」
「これは・・・心が踊る・・・」
　圧倒的なステータスを前に苦戦していた。そこに
「待たせたな!」

「ごめん！お待たせ！」
　アスナとクラインが合流する。だが依然として劣性だった。
「おいキリトよ」
「何だ!?小次郎！今余裕が無いんだ！」
「出し惜しんで死んでは元も子も無いぞ？」
「!?」
「その顔は悩む顔だ。大方何か隠し持っていてバレるのが怖いのか？」
「エスパーかよ、お前は。仕方ないか・・・おい１０秒持たせてくれ！」
「請け負った！」
　すると小次郎はボスの前に立ち
「まずは我が秘剣を食らうがいい。下がっておれ！アスナ！クライン！」
「応！」
「分かった！」
　グァァァァァ！
　振り下ろされる両手剣、それを紙一重で避けつつ小次郎は左足を軸に敵に背中を向け
「秘剣」
　右手で刀を握り、左手を添えた。それは小次郎が取る始めての構えというものだっ

た。
「小次郎様が構えを!?」
　驚愕するクライン。そして・・・・
「燕返し」
　ヒュオ！
　ボスに刻まれる三本の剣筋、レベルが上がっており目が良いクラインとアスナ、そして準備を終えたキリトには見えてしまった。
「三連撃じゃなくて・・・・・三発同時だった!?」
「今の・・・・・確かに刀が三本あったわよ!?」
「ほう、見切れるか」
　感心した声の小次郎、一気に二本消し飛ぶボスのＨＰゲージ、そして
「決めろ！キリト！」
「応！」
両手に剣を持ち、ソードスキルのエフェクトを輝かせたキリトが
「スターバースト、ストリーム！」
　まるで舞を舞うかのごときキリトの剣さばき、時に切り下ろし、時に切り上げ、ボスには大量の剣筋が刻み込まれた。そして遂に

パシャァァァァァン

第７４層ボスである、ザ・グリーム・アイズはその体をポリゴンへと変えた。

# 決闘

　ポリゴンとなってボスが消え去るのを見届けたところで気が抜けたのだろう、キリトは倒れた。何だかんだで赤ゲージまで減ったＨＰを膝枕のアスナさんが無理矢理ポーションを飲ませて回復させる。ってかそこ変われ！キリト！羨ましい！
「ってか小次郎様・・・・」
「様は止めろと・・・・・・・・」
「さっきのなんですか？いくら小次郎様が凄いとは言えたったの３回の攻撃であそこまでダメージが出るなんて・・・・ソードスキルも使ってないのに」
「うーむ、まあ明かしてもいいか。別に隠すことでもないし、エクストラスキルというやつだ。侍とかいう名前だったか」
「小次郎様にぴったりじゃないですか！で、入手方法は？」
「非常に言いにくいのだが・・・・・・ソードスキルをゲーム開始から一切使わず刀スキルの熟練度がＭＡＸ、その上でボスを数体倒すとある」
「・・・・・・・そんなの小次郎様以外無理じゃないですか・・・・」
　絶望した顔のクライン。するとアスナが

「それってどんな効果のスキルなの？」
「非常にピーキーだ。簡単な話刀のメリットデメリットを更に尖らせるもの。カスダメがほぼノーダメージになり、クリティカルは一撃必殺に等しい火力が出るようだ。後は刀以外が装備できなかったり、ソードスキルが一切使えなくなる位か」
「それは・・・まさしくあなたのためにあるようなスキルじゃないですか！」
「それは私も同意だ」
「んん？」
　起きたのだろう。蠢くキリト
「キリト君！」
　おー嬉しそうだな、アスナさん。俺もあんな風に思ってくれる彼女が欲しいものだ。あっ、叱られてら、まあそうなるな。

　その後はキリトがユニークスキルの二刀流を持っていることを明かしたり、それで回りがざわついたりした。まあエクストラスキルと違ってユニークスキルは本人でもどうやって入手出来たか分からないらしいから騒ぐのも無理無いか。だが、私は想像できていなかった。まさかこの後ああなるなんて・・・

数日後

「助けてくれ！小次郎！」

「なぜ私の所に来る、キリト」

「大勢が俺を追っかけてくるんだ！行く先々で囲まれて・・・もう限界だ！」

「人気者だな。良かったじゃないか。これでボッチともおさらばだな」

「人・・・・・怖い・・・・・・」

こうなったのは昨日発行された新聞にデカデカと

黒の剣士の二刀流、驚異の５０連撃の前にボス屈する！

随分と尾ひれが付いていた。

「いつからスターバースト・ストリームは倍の５０連撃になったんだ！」

「まあまあ落ち着け」

「てかなんで小次郎は平気なのさ！お前も報道されてたろ！」

「大方入手方法がはっきりしているエクストラスキルだと言うことと、恐らく私以外入手出来ないばかりか運用も出来ないと思われたからだろうな」

「くそ！」

ピコン！

「ん？メール？何だ？・・・・・・・マジかよ・・・・」

「どうした？キリトよ」
「血盟騎士団から勧誘だ。てかこの書き方は勧誘じゃなくて強制じゃないか。あっ」
「ん？」
　キリトはイイ笑顔を浮かべながら
「喜べ、お前もだ」
「まことか？」

　数日後
　ワー！ワー！
「で、なぜ我らはコロッセオにいるのだ？」
「そりゃ俺が嫌だって言ったらじゃあ剣で決めようってなったんだよ」
「私は知らないぞ？」
「言わなかったからな！」
　どうやらだいぶキリトは私を恨んでいるらしい。
「どっちからだ？団長様は既に真ん中で待ってるぞ？」
「俺が勝手に決めたんだ。俺から行く」
「頑張ってこい！」

意気揚々と出ていくキリト。さて、絶対防御と呼ばれる団長ヒースクリフのお手並み拝見といこうか。おお、盾で剣を隠しながら攻撃か、あれでは剣筋が読めない。それにあのエフェクトは・・・盾にも攻撃判定があるのか。お!キリトのソードスキルだ!流石の連撃にヒースクリフも・・・おお!防ぎ切った!ありゃ避けられないぞ。

Ｗｉｎ

ヒースクリフ

凄いな。まさかヒースクリフが勝つとは・・・・・

だが小次郎は感じていた。それは強者と戦える胸の高鳴りである。

「相手にとって不足なし!」

コロッセオ中心

「やあ、始めましてだね。小次郎君」

「御託はよい。さっさと始めよう。さっきから胸の高鳴りが収まらないのだ」

「ほう、ならば・・・・・」

5

「既に言葉は」

4

「不要か？」
3
「応とも」
2
「いざ尋常に」
1
「「勝負！」」
ピーッ！
まずはキリトの時と同じように盾で剣を隠しながら突進するヒースクリフ。だが
ガキャ！
長い小次郎の刀に阻まれる。圧倒的なリーチの差はなかなか詰められない。
ガキャン！キンキンキン！
「どうした？そんなものか？神聖剣の実力は！」
小次郎はほぼ突きに近いような戦い方であった。リーチを存分に生かして近づけさせない。ヒースクリフは防戦一方である。
「いやはや実際に戦うと分かるものだな。その長い刀は想像以上に驚異だ」
「そういうならそろそろ降参しても良いのだぞ？いい加減こちらも疲れるというもの」

「そのまま疲れ果ててくれると良いのだが・・・無理そうだな」
「その通りだ！」
ギャリン！
言葉を交わしながら一瞬の隙を突いて盾で刀を受け流すヒースクリフ、当然小次郎はそのままバランスを崩し大きな隙を晒す。
「勝負あったな」
そう言い剣を振り下ろすヒースクリフ。が、
「甘い！」
コンッ！
即座に柄の先で剣の腹を叩き、剣を反らす小次郎。そのまま切りつけるも
ガンッ！
盾に阻まれる。
「中々に良い腕だ。このままでは千日手だな。小次郎君」
「ならば次の一撃でもって終わらせよう」
ガキャン！
一際響く音と共にお互いに距離を取った。
ヒュイーン

ヒースクリフの剣と盾が赤く光る。
チャキン
「秘剣」
ヒースクリフに背を向けてあの構えを取る小次郎
ダッ！
駆けるヒースクリフ。一層目を細める小次郎
「ハアアアアー！」
気合いのこもった掛け声と共に剣を振り下ろすヒースクリフ
「燕返し」
静かに呟き剣を振る小次郎。一息のうちに三回剣を振るう。
「ッ！」
その時ヒースクリフの腕がブレた。具体的には振り下ろそうとした剣を止め、盾を構えた。その早さにポリゴンがブレた。すると
ガキャキャキャン！
流石のヒースクリフも燕返しをモロに食らってはダメージは無くとも吹き飛ばされる。受けきったヒースクリフの目に飛び込んだのは
「秘剣」

目の前であの構えを再び取る小次郎の姿。盾を構え直す時間はもう無い。すると
ヒースクリフは素早く
「リザイン！」
そう叫んだ。
ｗｉｎ
小次郎

チンッ
刀を降ろし、鞘に刀を納める小次郎。背を向けたまま
「興が冷めた。帰る」
その声には明らかに怒りが含まれていた。小次郎は帰り際に
「見損なったぞ。ヒースクリフ」
そう言い残して小次郎は大歓声を背にコロッセオを後にした。

# 荒れる剣豪

「秘剣！燕返しぃ！」

ヒースクリフとの決闘を終えた小次郎はそのままフィールドに向かいモンスターに八つ当たりしていた。普段は静かに呟く技の名前を叫んでいる事からも小次郎の行き場の無い怒りが伺える。

「あのときのヒースクリフ、明らかにおかしい動きをしていた。チートかそれに準ずるもの、あるいは裏技か。少なくとも技量でどうこうなる動きでは無かった！」

パシャァァァァァン！

消し飛ぶモンスター

「そして一番は、何故私はこうも怒っているのだ！」

パシャァァァァァン！

叫びと共に消し飛ぶモンスター達、気がつけば辺り一帯のモンスターは姿を消していた。潤沢になった小次郎のインベントリがモンスターの行く先を表している。

「まずいな、感情が収まらん。何が原因だ？」

暴れるだけ暴れてある程度落ち着いた小次郎はまずは原因を探ることにした。

「ヒースクリフが卑怯な手を使ったことか？いや、勝つためなら致し方無い事。ならばやはり……」
　空を見上げて
「途中で降参したことか。まだ戦えただろうに」
　あの時のヒースクリフのＨＰは満タン。燕返しが決まってもそのうち一つでも弾けば耐えられた筈だった。
「いや待て、降参せざるを得なかったと考えたなら？」
　ヒースクリフの有名な伝説にＨＰゲージが黄色以下にならないというのがある。
「もしやヒースクリフは裏技等といったちゃちなものではない別の何かを使ったとしたら？」
　だが考えてもこれ以上の進展は無かった。
「ええい！面倒だ！敵なら切って捨てる。ただそれだけよ！」
　自分に言い聞かせるように叫ぶ小次郎。
「さて、帰るか。ん？メッセージ？」
　開いたメッセージには日時と場所だけが載っていた。

第７５層市街地

メッセージにあった場所を訪ねるとそこは所謂稽古場と呼ばれる場所であった。小次郎が長い間世話になった場所でもある。
「一体誰が……」
「よっ小次郎」
「おお、キリトではないか。何用だ？」
呼び出したのはキリトだったらしい。キリトは、
「お前さ、決闘の後モンスターに八つ当たりしてたろ？」
「ほう、バレていたのか。恥ずかしながら感情が押さえられなくてな」
「珍しいな。でもまあ小次郎も人間なんだなって思ったよ」
「で、用件はなんだ？こんなところに呼び出して」
するとキリトは背負っていた黒と水色の二本の剣を抜いた。
「俺と手合わせしてくれ。ついでにここで気持ちに完全に整理を着けろ。今のお前さ、自分は平常心に戻ったと思ってるだろうが普段より顔が険しいぞ？」
「ふむ、そうだったか。私もまだまだだな。ならば断る理由はない」
シャラン
小次郎も背負っていた物干し竿を抜く
「ならば、参ろうか」

3

「望むところだ！」

2

「二刀流の力、拝見させてもらおう！」

1

「いざ尋常に」

0

「「勝負！」」

ピーッ！

「シッ！」

仕掛けたのはキリト、リーチを警戒してか超至近距離で戦うつもりらしい。

「素早いな。だが至近距離であっても戦えない訳では無いぞ？」

長い刀の柄に近い部分で剣を受ける小次郎

「良い鍛冶屋が打った刀だ。鍔迫り合いも問題なく出来る！」

だが、

「忘れたか？俺の剣は二本あるんだぜ？」

ヒュオ

右手で振り下ろされる剣。しかし、
「承知の上よ」
小次郎は刀を持つ手を上に上げた。そのまま打ち合った場所を支点にキリトに刀が迫る。
「チッ！」
ガキャン！
思わずバックステップで距離を取るキリト。距離を、取ってしまった。
「そこは私の間合いだぞ！」
ガキャキャキャン！キンキンキン！
怒濤の連続攻撃、小さく降られた刀は素早く次々に剣先が迫る。早さに自信があるキリトであっても捌くには両方の剣を使わないといけない程だった。そのせいでキリトは剣が届く間合いに近づけない。
「くそっ！拉致が開かない！」
捌きつつ構えを取ったのだろう。キリトの剣がソードスキルのエフェクトを纏い始める。両方が光っているのを見るに二刀流スキルだろう。
「ならばこちらもそれ相応の相手をしなくてはな」
左足を軸に右足を後ろへ回す。刃先を上に向け、左手を添える。

「秘剣」
「スターバースト！」
一瞬だけ打ち合いが途切れ、静寂が二人を包む。
「燕返し」
「ストリーム！」
ヒュオッ！
キリトに迫る三本の剣。二刀流故に一度に二本までなら迎撃出来るが・・・・
ザシュ！
一本だけは迎撃できずそのまま食らう。が、
「一発だけなら耐えられるぞぉ！」
「むむっ！」
キリトを切った直後で動けない小次郎に上下左右から剣が迫る。
「ぬぅ！」
そのまま刀を手前に滑らせ柄の先で右からの剣を反らす。しかし左からのは防げず、
ザン！
「うぉぉ！」
食らいながら雄叫びを上げて即座にバックステップ、が、

「甘いぞ！」
小次郎の目の前にはきっかり自分を追いかける二本の剣。だが小次郎の顔に浮かんだのは焦りではなく笑みだった。
「同時で無いなら防ぎようはある！」
一度に襲う剣の数は二本。到底全ての迎撃はできない。だがそこは小次郎。長い刀を器用に回して剣を防ぐ。１５連撃目にもなると明らかに余裕が見えた。それと同時にキリトに浮かぶ焦りと諦めの表情。
キィン！
そして２５連撃を捌ききった小次郎の目の前で長い硬直時間で動けないキリト。
チャキ……
「勝負あったな。キリトよ」
悠々とキリトの首元に刀を添える小次郎。
「だな、降参、リザインだ」
キリトとの手合わせを終えた小次郎はその後近くの料理屋でキリトと食事と洒落混んでいた。
「やっぱり小次郎はすげえな。忘れてたけどお前の燕返しってソードスキルじゃないか

ら硬直も無いんだよな。控えめにいってチートだろ。それ」
「私としては練習せずともあのような連撃が繰り出せるのは凄いと感じるのだが？」
「それは剣をあまり極めていない俺への嫌味か？」
「はっはっは、気に触ったなら申し訳ない」
　その後は少しばかり他愛もない話をしたところで
「で、本題なんだが・・・ヒースクリフ、どう思った？」
「クロだな。クロで無いとしてもあちら側（運営）の人間だ。あの時の動きは明らかにおかしかった」
「お前もそう思うか。でもだからって何か出来る訳でも無いしな」
「ああ、最悪ＢＡＮされたら打つ手がない。今は様子見だな」

　カランカラン
　店を出た二人は
「じゃあな。またボス戦で会おう」
「さらばだ。キリト」
　互いに別の方向へ歩き出す。そして最後に
「小次郎！お前、イイ顔になったな！」

キリトの呼び掛けに片手を上げて答えながら去る小次郎の顔は晴れやかだった。

# 第７５層ボス戦　～ザ・スカル・リーパー～

キリトとの手合わせを終えた数日後、小次郎の元に一通のメッセージが届く。差出人はヒースクリフであった。

「ふむふむ、ボス攻略会議を行うから血盟騎士団本部まで来いと……今回はそこまでなのか」

今までのボス戦は戦う前に軽く打ち合わせをする程度だったことを考えると異例のことであった。

血盟騎士団本部

会議室には血盟騎士団以外にも小次郎を含むソロの攻略組や、様々なギルドのトップが集まっていた。中央に座るヒースクリフが口を開く。

「揃ったようだな。今回集まって貰ったのは他でもない。第７５層ボス戦の会議だ。というのも我々が出した偵察部隊が消息を絶った。前回のボス戦がそうであったように結晶無効エリアだそうだ。今後の全てのボスがそうであると考えるのがいいだろう。だがそれだけならばこのような会議は開かない。どうやら今回のボスは戦う際に扉が

閉じられるらしいのだ。どんな攻撃も効かないらしく、扉が開いた時には入った偵察部隊がいなかったらしい」
「それってつまり‥‥」
「ああ、一度挑むと死ぬか倒すかのどちらかということだ」
ざわつく面々。今までは不利ならば逃げればよかった。しかし今回はそれができないと言うのだ。
「だが、いつかは倒さないといけないボスだ。腕に自信のある者だけ、明日ボス部屋の前に集まってくれ」

翌日、ボス部屋前
「どうやら欠員はいないようだな」
そこには誰一人欠けること無く全ての攻略組が集まっていた。
「では、いこうか。それぞれの役目は把握しているな?」
「「応!」」
ギギギギギィ
ゆっくりと開く扉。次々と駆け込む攻略組。が、
「どこにも何もいないぞ?」

しかし小次郎は
「こういうときは大抵天井に張り付いているか地中に潜っていると相場が決まっている！各自散開して密集するな！」
小次郎は以前プレイしたＭＭＯＲＰＧでボスがいないと思って油断していると天井からの一撃で死んだ記憶があった。案の定
「上だ！」
誰かが叫ぶ。見上げるとそこには赤く光る目を持ったムカデのような体に人間のような体、カマキリのような腕を持つボスがいた。
キシャァァァ！
「うっうわぁぁぁぁぁぁ！」
真下にいたプレイヤーが一人モロに一撃を食らう。すると
「あっ……あああああああ!!!死にたくなあああい！止まってくｒ!!」
パシャァァァァァン
死んだ。豊富なＨＰが仇となりジワジワ減るゲージを見ながら死んだ。それを見たプレイヤー達は
「嘘……だろ。仮にも攻略組が……一撃で？」
呆けるプレイヤー。だがボスは待ってくれない。一人の呆けたプレイヤーにボスの

鎌が迫る。が、
ギン！
ヒースクリフが間一髪で受け止める。その音で我に返ったらしい。漸く動き始めるプレイヤー達
「セオリー通りにやるだけだ！タンク部隊！しっかり守れ！攻撃は我々が請け負う！」
小次郎はそう叫び皆だけでなく自分にも言い聞かせる。
「まずは様子見だ。ボスの一挙一動を見逃すな！死ぬぞ！」
次々と前に出る盾役。しかし、
「駄目だ！ちゃんと守っても一撃で黄色ゲージになる！」
それはヒースクリフも例外では無いらしい。周りよりは少ないが、ジワジワと、ＨＰゲージが減っていた。
「不味いな。このままではじり貧だ。リスクは高いが……やむをえん」
小次郎はボスのモーションを覚えるのを一旦中止し
「このままではじり貧だ！やられる前にやるしかない！キリト！ヒースクリフ！その他ダメージディーラー！行くぞ！他のは我々の援護を頼む！」
「了解だ」
「心得た」

「では、行くぞ……」
突進するキリトとヒースクリフを見ながら小次郎は静かに近づく。ヒースクリフは盾で受けた後に一撃を加えている。キリトも何とかやっているらしい。私もやるか、
「秘剣」
ボスの攻撃を避け、歩きながら刀を構える。
ヒュオ！
光ながら振り下ろされる鎌、が、
「遅いな」
いつものように左足を軸に右足を下げて、
「燕返し」
ドガァァァァァン！
凄まじい音と共に吹き飛ぶボス。それほどまでに強烈な一撃だった。沢山あるボスのＨＰゲージを二本消し飛ばす攻撃。だがまだ半分以上残るゲージが絶望感を漂わせる。当然ヘイトが高まり反撃される小次郎。だが、
「生憎敵は私だけではないぞ？」
スキル後硬直のない小次郎は悠々と避ける。その隙にキリトがソードスキルを放つ。また削れるゲージ

「どんなに強い攻撃も、相手が定まらなければ意味が無い」
前後左右から殴られるボス。右を攻撃すれば左から攻撃される。といった具合に順調にゲージは削れ……
「よし！後一本だ！」
その時小次郎は咄嗟に後ろに飛んだ。理由はない。ただ嫌な予感がしたのだ。仮にもボスがこうも容易く死ぬだろうか？見ればヒースクリフやキリトといった経験豊富な攻略組は下がっていた。だが一部の最近攻略組になった者が逃げ遅れる。ボスは目を一層光らせながら
キシャアアア！！！
尻尾と両手で周りを凪ぎ払った。ほとんど予備動作が無かった。故に
パシャアアアアアン
数人がポリゴンに変わる。当然のように一撃だった。
「油断するな！仮にもボスだ。慎重に攻撃しろ！」
小次郎は必死に動揺する仲間を鼓動する。そうしないと自分も立ち止まりそうだった。
「同時に行くぞ！」
「ああ！」

「秘剣‥‥燕返し！」
「スターバースト、ストリーム！」
「ウオオオオ！」
皆が息をあわせて必殺のソードスキルを放つ。長引かせたくない。さっさと倒したい。死にたくない。皆の気持ちが一つになった。そして遂に
パシャアアアアン!!!!
ボスが、消えた。だが誰も勝利の雄叫びを上げない。払った代償が大きすぎたのだ。
「何人‥‥‥死んだ？」
消え入りそうな声で聞くプレイヤー
「あわせて‥‥２０人だ」
２０人。それは今までの倍以上の死者である。それだけ苛烈な戦いだったのだ。小次郎も
「必死で聞かないフリをしていたが‥‥‥やはりそれだけが死んだか」
砕けるポリゴンの音から必死で意識を反らしながら戦っていた。暫く呆けているとピコン
メッセージである。
「一体誰だ？こんなときに」

そこには

『ヒースクリフを見てみろ』

キリトからだった。こっそり見ると・・・・

「なるほど。そういうことか。しかし、隠す気が本当にあるのか?あの男は」

ヒースクリフの顔は穏やかだった。しかし、その目はまるで養豚場の豚を見るような、管理者の目だった。因みにＨＰは黄色、つまり半分になっていない。だが戦闘中にヒースクリフはポーションを飲んでいない。明らかに不自然である。

『十中八九ヒースクリフが茅場だろうな。だが分かったところでどうする?』

『俺に良い考えがある。それは・・・・・・・』

『馬鹿な!リスクがでかすぎるぞ!』

『でも今しかない。協力してくれ』

『・・・・・・・・・・・請け負った』

一通りメッセージでやり取りした小次郎とキリトはごく自然に立ち上がりヒースクリフに近づく。

「ん?どうしたのかね?」

「いやなに、ヒースクリフ殿」

「実はあなたにちょっと」

「聞きたいことがあってな！」

ヒュン！

小次郎の居合い切りとキリトの振り下ろし。ソードスキルは発動していない上、小次郎は明らかに手加減した攻撃。当たったとしても二人のカーソルがオレンジになるだけで死にはしないだろう。だが防ごうにも一度に防げるのは盾と剣あわせて二つまで。小次郎とキリト合わせて三つの攻撃は防げず

ガィィィン

鈍い音と共に弾かれる剣。だが弾いたのは剣でも盾でもなく

［Ｉｍｍｏｒｔａｌ　Ｏｂｊｅｃｔ］

街とかで見かける紫色の障壁だった。それすなわち

「不死属性。説明してもらえるかな？ヒースクリフ、いや、茅場殿？」

ヒースクリフと茅場が同一人物である証である。

# 予定外の最終決戦

「不死属性。説明してもらえるかな？ヒースクリフ、いや、茅場殿？」
私の問いかけにヒースクリフは
「ここでバレてしまうとは、想定外だったな。ああ、私こそが茅場晶彦その人であり、君達を第１００層で待つ予定だったラスボスでもある」
その言葉に固まるプレイヤー達。その中で唯一立ち上がったのは
「俺達を・・・・・騙してたと。そう言うんですか！団長！」
一人の血盟騎士団の団員であった。手には巨大なハルバードが握られている。
「ああ、そうだ」
短く、素っ気なく返すヒースクリフ。すると
「俺の・・・・・忠誠心を・・・・・返せぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!!!!!!!」
ヒースクリフに突進する。しかし
「それは困る」
ヒースクリフが手を振った瞬間ここにいる全員が地に伏した。見れば麻痺の状態異常が着いている。そのアイコンの下にある有効時間を示すカウントは９９：５９：５９

を指していた。
「何だ……これ、９９時間の麻痺状態？まさか貴様！ここで全員始末する気か!?」
　ヒースクリフは穏やかな表情を崩さず
「いや、そんなことはしないさ。予定が狂ったが私はここで君達と別れるとしよう。何、この部屋はボスが死んだ今どのモンスターも湧かないし、入ってこないセーフゾーンだ。安心したまえ。それに私が去った後で君達の麻痺は治してあげよう」
　そう言ったヒースクリフはおもむろにキリトの元へ行く
「だが、私の正体を見破ったことを評価してキリト君か小次郎君のどちらかに今この場で私に挑むチャンスをあげよう。何、不死属性は解除するし、私がもしここで破れればその瞬間にＳＡＯはクリアとなる。悪い話ではないだろう？無論拒否しても構わないがね」
　それは願ってもない話だった。目配せをした二人は
「俺がやる」
　キリトがそう言った。
「馬鹿を言うな！」
「挑発に乗るんじゃねえ！キリト！」
　皆がそう言うがキリトは真っ直ぐヒースクリフを睨んだ。

「うむ、よかろう」
　するとヒースクリフはキリトから離れ再び手を振った。キリトの麻痺を解除したのだろう。立ち上がるキリト
「では・・・・」
　キリトの元にメッセージが届く。ヒースクリフから完全決着モードでの決闘が申請されました。というメッセージだ。完全決着、それはＨＰ全損まで戦うモード。普段では決して使われないはずの禁忌のモードだった。迷わずキリトはそれのＯＫを押す。
　３
　カウントが始まる。お互いに剣を抜き、一言も喋らない。
　２
　微動だにしない二人、それを見守る地に伏したままのプレイヤー達
　１
「言葉は不要か」
　口を開くヒースクリフ
　ピーッ！
「ぜあぁぁぁ！」
　切り掛かるキリト、防ぐヒースクリフ。

『こいつはこのゲームの製作者、ソードスキルのモーションを全て覚えてる筈。ならソードスキルは使っては駄目だ！』

そう考えるキリト、その考えは正しかった。慣れないソードスキル縛りの戦いをしつつ

「やっぱすげえよ小次郎は、普段からソードスキル無しで戦ってるんだからな！」

「おや、ソードスキルを使わないと思ったら、流石に気がつくか。私にソードスキルが通用しないことを」

「当然だ！」

切る、防がれる、切られる、避ける、その戦いは苛烈を極める。だがその均衡もいつまでも続く訳はなく

「ぐっ」

「ぬぅ」

お互いに少しずつダメージを受ける。端から見るとソードスキルの輝きもないつまらない戦いだが当事者にとっては必死だった。何せ生死がかかっているのだから

「相変わらず堅すぎるぜ！あんた！」

「そちらこそ。二刀流を持つに相応しい素早さだな」

暫く膠着状態が続く。ここで年齢と落ち着きの差が出てしまった。往々にして若者

は年配者より抑えが効かない傾向にある。そして癖というものは分かっていてもなかなか抜けない。つまり何が起こったかというと……

「ちくしょおおおぉ!!!」

ヒースクリフがわざと見せた隙に反応して思わず放ってしまったのだ。しかも硬直の長い２７連撃の二刀流最上位ソードスキル、ジ・イクリプスを。当然ヒースクリフは

「フッ」

キリトを見もせず盾で的確に防ぐ。放ったソードスキルは自分の意思では止められないため

「くそっ!ここまできて!」

ヒースクリフのＨＰは何と黄色まで削れていた。当たれば倒せただろう。当てられたなら。そして遂に

バキャ!

最後の一撃と共に砕け散る水色の剣。それを見届けたヒースクリフは

「では…さらばだ、キリト君」

硬直で動けないキリトにゆっくりと、絶望を与えるかのように剣を……

ザシュッ!

「何……だと?」

振り下ろせなかった。何故ならヒースクリフの胸元から一本の刀が生えていたからだ。
「まさか……だがどうやって？」
かろうじて後ろを向くヒースクリフ。そこには
「美味しいところだけ横取りするようで申し訳ないが……」
ズプ
刀を抜く
ヒュオ
一閃、そして次の瞬間
パシャァァァァン！
ヒースクリフが、その体をポリゴンへと変え、消えた。そして
『ゲームはクリアされました』『ゲームはクリアされました』
アナウンスが繰り返される。小次郎は
「すまんなキリト。生きているか？」
「ああ、生きてるよ。死ぬかと思ったけどな」
「キリトくぅぅぅぅぅん!!!!」
アスナさんがキリト目掛けて飛び付いた。生きてて嬉しいのと危ないことをしたこ

とへの怒りとが混ざりあった何とも言えない表情をしていた。
「しかし……ここはどこだ?」
キリトとアスナ、小次郎の三人は空中にいた。見れば目の前に崩れ行くアインクラッドがある。すると突然
「圧巻だな」
茅場晶彦がいた。ヒースクリフではない、白衣を着た姿で
「お前!死んでないのか?」
「難しい質問だね。そうとも言えるしそうでないとも言える」
すると茅場はこちらを向き
「まずはこれを言わないといけないな。ゲームクリアおめでとう。現在アインクラッドに残った全てのプレイヤーのログアウトとサーバーの削除が進んでいるところだ」
「あ、ありがとう。その…茅場、実は死んだプレイヤーは現実では生きてるとかは」
「無い。人の命は一つだからね」
キリトの質問にそう答える茅場
「狂っていると思うかい?何、私の幼い頃からの夢を叶えた結果なんだ。昔の私は空飛ぶ鋼鉄の城をよく想像したものだ。何故デスゲームにしたのかというと……ゲームを越えた、もう一つの現実を知ってほしかったんだ。ところで一つ聞きたいことがある

んだが」
「何だ？」
　茅場は爽やかな顔で
「どうだったかな？この世界は？」
　暫くの間を置いて
「「最高だった！」」
　三人の声がハモる。それを聞いた茅場は満面の笑みを浮かべ
「製作者冥利に尽きるというものだな」
　そう言う茅場の体は崩れつつあった。
「おい！どういうことだ！茅場！」
「何、無理をしてここにいるということだ。そろそろ限界なのでね。この辺りで失礼するよ。では諸君、さらば！」
　そう言い残して茅場は消え去った。だがまだ城は崩れきっていない上に自分達もまだ消える気配はない。
「どうやらまだ猶予があるらしいな。キリトよ。最後に何か聞きたいこととかあるかな？」
「最後の・・・どうやったんだ？麻痺があっただろ？」

「ああ、あれか。それはな」
口を開ける小次郎。そこには細かいガラス片が刺さっていた。
「万が一に備えて口の中に状態異常回復ポーションを仕込んでおいたのさ。私はソロなのでね、最悪を想定していつも仕込んでいるのだ。幸い解除可能な類いのものだったからな」
「そんなのするのお前くらいだよ。小次郎」
「ははっ、違いない。おや？」
気が付くと小次郎はログアウトの光に包まれていた
「時間が無いな。おい！キリトよ！」
「ん？なんだ！」
「またどこかで会おう！」
シュン
そして鋼鉄の城に名を馳せた一人の侍は姿を消した。

# 帰還

「んん？」
　ログアウトの光に包まれた小次郎は目を覚ました。ひんやりとしたベッドに寝かされているらしい。
「ここは……現実世界か？」
　小次郎から古原謙二へと戻った彼は動かない体に驚愕する。
「体が録に動かん。かろうじて首は動くが……ここは病院か？」
　震える右手を掲げ下に下ろす。慣れ親しんだ行為だがメニューは出てこない。
「ふむ、無事に帰還出来たらしいな。まあ頭にナーヴギアがあるからそうなのだろう。だが動けないのは不便だが、出来ることもない。寝るか」
　そう言い目を閉じた

「ぐぬう」
　が、寝られない。外が騒がしすぎるのだ。
「大方目覚めたＳＡＯプレイヤーの対処でてんやわんやなのだろう。しかし暇だな」

謙二の元へ看護士がやって来たのはそれから数分後。簡単な質疑応答を済ませるとこれから日常生活を送らせる為のリハビリをすると言った。だがいかんせん人が多すぎるため毎日とはいかないそうだが

「凄いな。人とは寝たきりが続くとこうもダメになるのか。しかし……二年か」

二年。それはＳＡＯに囚われていた日数。余りにも長すぎて数えていなかったがそんなに経っていたのかと驚く謙二。

「勉強は……まあ大丈夫だろう。前世の知識のお陰で大学入学程度までならカバーできるし」

「取り敢えずは看護士に言われた腕を動かすリハビリからだ。このままでは飯も食えん。長くなりそうだ」

その翌日

ゴロゴロゴロ

病院らしい音でドアが開く。また看護士かと思った謙二の目に飛び込んだのは

「ホントに……無事に目覚めたんだ」

涙を流す紺野さんがいた。

「ああ、ただいま、だな」

落ち着いた口調で答える謙二。
「う、うう・・・おがえりいいいいい！」
泣きながら抱き付く紺野さん。それを黙って受け止め頭を撫でる。
「心配かけたな。紺野さん」
「それなんだけどね・・・・・」
「ん？何だ？」
もじもじする紺野さん。
「実はね・・・・・今のボク、紺野木綿季じゃなくて古原木綿季なんだ」
「・・・・・？」
固まる謙二。そして
「それは・・・・どういうことか・・・説明してもらえるかな？」
「それは・・・・・」

全てを聞いた謙二は思わず天を仰いだ。
「つまり・・・・家族だと？」
「うん」
「・・・・・・何て呼んだらいいんだ？」

「そうだね。木綿季ちゃんとでも呼んでよ！」
「うぐっ、いきなりちゃん付けは……」
「ダメ？」ウワメヅカイ
「ああ！分かったよ！だが家族ならばちゃんはおかしいからちゃんは付けないぞ。木綿季」
「呼び捨てか……まあそれでもいいよ」
「お気に召したようでなによりだ」
　すると木綿季は
「ねえ謙二、少し老けた？」
「何!?」
「何か前会ったときより喋り方がおじさん臭いというかなんというか」
「それは……まあ、二年間も役を演じていたからな。ここまでだと演じるというよりは人格が変わると言ったところだな」
「そっか、でもボク、今の謙二も大好きだよ！」
　思わぬ不意打ちに動揺する謙二。女性経験が前世を含めて著しく欠如しているためこういったことに弱いのだ。
「なっ！あまりからかわないでくれ。年頃の男の子はそんなことを言われると誤解する

んだぞ?」
「ふーん」
「何だ!?その何かを悟ったような目は!?」
「いやぁ、何でもないよ?そろそろ時間だね。じゃあまた来るね。リハビリ、頑張って!応援してる!」
「ありがとう」
　出ていく木綿季を見送った謙二は暫くベッドで悶絶する事になる。
「大好きだって?木綿季が?いやいやまだ彼女は若い、子供だ。どうせ一時の気の迷いに違いない。うん、きっとそうだ。思春期によくあるやつだ。うん、私はよく知っている。うん」

　木綿季ｓｉｄｅ
「あ～可愛かったなぁ謙二」
　お見舞いを終えた木綿季はそう言いながら歩く
「あのとき普段は落ち着いてる謙二が明らかに動揺してた。耳まで真っ赤だったし。もしかして謙二ってストレートな言葉に弱い?」
　女の勘というのは恐ろしい。実際に謙二は別の解釈の余裕がないストレートな言葉

に非常に弱かった。
「ふふっこれで少なくとも他よりは一歩リードかな？ボクをその気にさせた責任、取ってよね？」
小悪魔のような笑みを浮かべる木綿季。お母さんに恋だと言われてから抑えが無くなったのも原因の一つだろう。
「まずはお見舞いだね。多分リハビリで疲れるだろうから」

それから数週間、謙二は地獄を味わった。日数が取れない上に若いということもあってかリハビリはかなりハードなものだった。それを全て耐えられたのもひとえに木綿季の手助けあってこそである。そして
「ただいま」
「「お帰りなさい！」」
ようやく帰る二年ぶりの我が家、だがそこには二年前にはいなかった木綿季がいる。
「凄いな。ゲームを終えたら家族が一人増えていたとはな」
「二年間ってそれくらい長いんだよ！謙二！」
「そうか……取り敢えずは部屋に戻ろう」
階段を上がって久々の自室に入る謙二そこには

「おお、あのときから何一つ変わっていない。まさしくここは私の部屋だ」
　何一つ変わっていない家具の配置。恐らくいつ帰ってもいいように掃除だけはしていたのだろう。それに思わず涙する謙二
「ああ、これは、良い」
　だが一つだけ違うのは枕元にあったナーヴギア一式である。跡形も無くなりそこだけぽっかりと空間ができていた。
「これに虚無感を抱くとはな、それほどまでにあの世界は残酷だが素晴らしかったのだな。というかいい加減にこの口調を直さなければ。学校に復帰したときに虐められかねん。自分が原因で虐められるようなことは無くさないと」
　だがそれも杞憂だった。ＳＡＯ生還者は特別の学校に通うことが決められていたのだ。しかし、回りとの解離を無くすと言えば聞こえは良いがただの隔離処置である。世間ではＳＡＯ生還者＝野蛮人と考えられている事にまだ謙二は気が付いていなかった。

# 変わり果てた日常生活

普通の現実世界での生活を再び送り始めた謙二は想定外の事態に見舞われた。それは・・・

「どれ、久々に散歩でもするか。運動は大事だし、二年でここいらがどう変わったのか知りたい。まだ学校も始まらないしな」

家を出て近所を散歩する謙二。田舎ということもあってあまり風景は変わっていないらしい。

「ふむ、あまり変わっていないな。お、」

向こうから歩いてくる親子連れ。普段から見知らぬ人にも挨拶を心がけていた謙二は

「こんにちは！」

普通に挨拶をした。すると

「ん？あなたはもしかして古原謙二さん？」

母親の目は警戒の目だった。不思議に思いつつ

「はい、そうですが」

そのとたん母親の目は警戒から嫌悪感漂う目に変わった。隣にいた子供を庇うように立ち

「家の子に近づかないで！消えなさい！ゲームに溺れた野蛮人め！」

思わず思考が止まった。今・・・・・なんて？

「良い？あなたもこんな人とは喋っちゃダメよ？この人は危ないから」

子供にそう言い聞かせる母親

「うん。分かったよ！」

子供とは残酷である。親の言うことを理由も聞かず聞き入れる。見れば子供も嫌悪感を持った目をしていた。

「早く！ここから消えて！」

タタタッ

そう言って走り去る親子連れ。暫く放心状態だった俺は気が付くと自室にいた。どうやって帰ったかは覚えていない。

「いや待て、落ち着け、俺。もしかしたら偶然所謂モンペというやつと出会っただけかもしれん。もしかしたらあの母親だけがああ思っていたんだ。うん、きっとそうだ」

思い出しただけで震える体。あの剣の世界で常に冷静沈着だった侍の面影はどこにもない。

「思い出せ！前世を。あのときよりは何倍も良いじゃないか。あの頃は家は寝るだけの場所、毎日仕事に追われてたあの頃よりはずっとマシなんだ。マシなんだ！」

そう必死に自分に言い聞かせる謙二。

「明日、公園に行ってみよう。あそこは多くの子供が集まる場所だ。そこでならこんなことにはならない筈だ。うん。そうに違いない。その筈だ」

「それに万が一のことがあっても俺には帰る場所がある。そうだろう？」

翌日、謙二は家を出ようとして……

「何故だ？何故足が震える？今までの虐め何かに比べれば屁でも無いだろう？うーむ。もしやまだ体が本調子じゃないのかな。まあ動かせばそのうち直るだろう」

動かない足を手を使って無理矢理動かす。そして公園へと向かう謙二。公園までそんなに距離はない。精々数分と言ったところだ。遊具も揃うそこそこ大きな公園。その入り口を通りすぎた。その時

「あ！」

偶然だろう。昨日の子供が遊んでいた。しかも入り口の側で。子供は

「ぎゃあああああ！」

叫んで逃げる。まだ声も掛けていないのに、すると血相を変えた母親が来た。

「何しに来たの!?まさか子供を殺そうと!?皆！こいつが例の野蛮人よ！追い出しなさい！」

見れば公園にいる全員が嫌悪感を隠そうともせずこちらを見ている。

ビシッ

痛い。何かを投げられたようだ。石？

見れば何人かの子供が石を投げてきた。なるほど子供がやることならこちらは反撃できない。もししたならばもっと立場が悪くなるな。ならば

「うぎゃあああああ！」

わざとらしく悲鳴を挙げて公園を出る。子供の笑い声を聞きながらこっそり外から中に聞き耳を立てる。あの世界で実力者をも気づかせない隠密スキルは現実でも遺憾無く発揮できた。

「良かったわね。何も起こらなくて」

「ええ、あんなのがいると安心して過ごせないわ」

「でも可哀想なのは古原さんよ。帰ってきちゃうんだから。あんな駄目息子が」

「そうね。家だったら縁を切るわ。あんなの」

「これからも子供を守るために頑張りましょう。でも一つだけ。危ないのはあの息子だけだからね。古原さん一家に罪は無いからそこんとこは弁えなさいよ？」

「家の子にも言い聞かせておくわ。流石に家に石投げて窓が割れでもしたらこっちが悪いことになる」
「そうね」
一連の話を聞いた謙二は不思議と落ち着いていた。
「そうか、俺だけがターゲットで家族に影響は無いのか。なら俺が我慢するだけで事足りるな」

家に戻った謙二は自室に戻ると
「ハッ！馬鹿らしいな。しかしこうも現実世界が生きにくいとは思わなんだ」
「だが、俺が平気にしていれば家族は、木綿季は安心する筈だ。傷付くのは俺だけで良い。なんかいつでもどこでもこうだな。俺って」
そう言い聞かせる謙二。だが、あの影響は自分が思う以上に堪えていたのだった。前世から患っていたコミュニケーション障害、通称コミュ障が悪化したのだ。それはもはや人間不信に近いレベルである。外に出ようとすると足が震える。家族以外の他人と接近しただけで冷や汗が出る、といった具合にだ。ここまで来るとさすがの謙二も認めざるを得ない。
「平気な・・・・・筈なんだ。そうだろう？俺よ」

外に出なくなった俺への嫌がらせはエスカレートした。窓は開けていれば嫌がらせの手紙が投げ込まれる。そのせいでここ数日は窓を開けなくなった。外には大抵嫌がらせの何かがあるので見ないようにカーテンも開けなくなった。それでも部屋の外には出られたため

「おはよう、木綿季」

「おはよう！謙二！」

うむ、いつも通りの朝だ。木綿季も元気一杯で非常に良いな。バレて無さそうだし。余裕だな。こんなの。散歩に行かなくなって少し心配されたがまだ足が痛む。その分部屋で鍛練していると言ったら納得してくれた。ははっチョロいな。だが、いつまでもこうはしていられない。隠せないときが来る。そう

「すこぶる……不味い」

学校である。学校に行くということは家の外に出るということ。学校自体に抵抗はない。何せ通うのはＳＡＯ帰還者だけだ。問題なのは

「外に、出られん」

家族に配慮してか家族の目に付くところでの嫌がらせは無い。だが外に出られないのだ。体が拒絶するのだ。

「まあ、なるようになるさ」

そして登校初日、案の定

「どうしたの？学校遅れるよ？」

「なるようにはなったが……」

どうにも一歩が踏み出せない。ただ玄関をくぐる。ただそれだけなのに

「ぐぬう。不味い。このままでは」

そう、このままでは間違いなく家族に迷惑がかかる。もし近所のせいだと分かったなら十中八九騒ぎになる。そうなりかけた前例もある。それだけは避けなければ。だが！

「足が……」

「足がどうしたの？」

早く何か言い訳を考えろ！俺！不自然でない言い訳を！そうだ！

「どうやら緊張もあってか足が震えるんだ。どうしよう？」

そう！ぼかすところをぼかしてありのままを伝える。あまり嘘を塗り固めると取り返しが付かなくなるからな

「ふうん。今まで緊張と無縁だった謙二が？」

「流石の俺でも二年越しの登校は緊張するんだ！」

「小学校一年生の時は緊張してなかったよね？」
「それは……その……」
　疑いの目で見つめる木綿季。不味いよ～
「まあ、そういうこともあるよね」
　よっしゃああ！勝った！第三部、完！
「学校まで送ってもらおっか」
「面目無い……」
「いいのいいの」ギュッ
　おや？手を握られたら歩けはする。これなら行けるか？
　パッ
　カタカタカタカタ……
「むー」
　不味いいいいい！今明らかに不信がられた！だってスイッチのごとく手を離した瞬間震え始めたもん！
「どういうことか……説明して」

木綿季ｓｉｄｅ

最近謙二の様子がおかしい。家に帰ってすぐの頃はよく散歩に出かけたりしてたのに最近はめっきり出なくなった。顔色も本人は気が付いて無いらしいけど悪い。何かあったんだろうな

「でも謙二が何も言わないってことは……」

何かされることを望んでないんだろうな。まあ、いよいよって時には問い正せばいいか！

そして登校初日、

「どうしたの？学校遅れるよ？」

見送るボクの前で挙動不審な謙二。ふむふむ、足が震えてるね。隠そうとしてるけど隠せてない。やっぱり……

「足がどうしたの？」

ちょっと聞いてみると焦った様子で緊張のせいだと言う。これは……クロだね。

「学校まで送ってもらおっか」

「面目無い……」

「いいのいいの」ギュッ

手を握ると謙二の足の震えが止まる。

パッ

カタカタカタカタ……

うん。隠せて無いね。手を離した瞬間震え始めた。見ればヤベーって顔してる。流石にこれは見過ごせないね。

「どういうことか……説明して」

自分でも驚くくらい低い声が出た。

# 心の支え

「どういうことか……説明して」
　不味い、すこぶる不味い。どうしよう?
「それ、緊張とかじゃないよね? 何があったの?」
「実はネットサーフィンをしていt」
「嘘を言わないで。謙二が外から帰ってからずっとそうなんだもん。それとも、そんなに人に言えないことなの? 秘密は守るからさ。お母さんに言えないことならせめてボクだけにでも話してよ」
　心底心配そうな顔で迫る木綿季。ここまでか……
「分かった。白状するよ。実は……」
　洗いざらいぶちまけた。話してる途中で思い出したせいだろう。足だけじゃなくて体も震え始めた。涙も出てきた。押さえようとしても収まらない。すると
　ガシッ
　力強く、それでいて優しく抱き締められた。同い年に抱き締められているのに沸き上がるのは恥ずかしさでも興奮でもなく安心感だった。以前俺がしていたように頭を撫

でてくる木綿季。
「回りが何と言ってもボクだけは謙二の味方だから。そうやって抱え込んで壊れちゃうの謙二の悪いとこだよ?」
「……すまん」
男のプライドが少しは残っていたのだろう。声は我慢できたが涙は止められなかった。静かに泣き続ける俺を木綿季はそれが収まるまで撫で続けた。泣く赤子を宥めるように。

それから数分後、落ち着きを取り戻した俺は
「すまんな、女の子の腕の中で泣くなんぞ情けないな」
「いいよ、それが謙二の助けになるならね。ところで、このことは…」
「うん、絶対にお母さんには内緒だ。小学校の時に俺が虐められてるのがバレたとき学校に殴り込みに行こうとしてたからさ。幸いターゲットは俺だけだ。俺のせいでこの地域に住めなくなるのは申し訳がない」
「じゃあどうするのさ?外出られないんでしょ?あっもしかしたら……」
そう言って手を握り直して外へと行く木綿季。
「おい!……あれ?」

「うん。思った通り！」
　問題なく外に出られた。震えも無い。
「このまま登校すればいいんじゃないかな？」
「でも、それじゃあ木綿季の学校は……」
「気にしないで。秘策もあるからさ」

　学校までは電車を乗り継いで通学する。通えなくは無いがそこそこ距離があり1時間ちょっとかかる。
「すまない。結局学校まで付き合わせてしまった」
「いいのいいの、気にしないで。それより……大丈夫そう？手を離しても震えは無さそうだけど」
「ああ、何とか。見馴れた顔もいそうだし頑張るよ」
「無理はしないでね」
「当然だ」

　入学式と簡単なガイダンス。どうやら初日はこれだけのようだ。本格的な学校は明日からだ。

次の日、親を適当な理由で説得してまた学校まで木綿季が付き添ってくれた。申し訳無さが募る。どんよりした気持ちで教室に向かうと
「おはようございます!」
爽やかそうな先生がいた。
「おはようございます」
挨拶を返して席に座る。人数は精々数十人といったところか。まあＳＡＯに巻き込まれた現在中三はこれくらいか。お、
俺は古原なので席は前の方だ。そして俺の目の前にとても可愛らしい、見覚えのある女の子が座った。全員揃ったところで
「どうやら全員揃ったっぽいので始めますね。まずは自己紹介から。取り敢えず名前ともしよければプレイヤーネームも言ってほしいな。多分皆そっちの方が親しみがもてるでしょ?でも呼ぶときはちゃんと名前で呼ぶようにね?まずは私から……」
驚いたのは担任もＳＡＯ帰還者だったということ。こんな人も巻き込まれてたのか……さて、生徒たちの自己紹介だが、
「えっと、綾野珪子って言います。皆にはシリカって言った方が分かりやすいかな?よろしくお願いします!」

どよめく教室。シリカといえば中間層で大人気だったビーストテイマー。その容姿も相まってアイドル的な扱いをされていた。まあＳＡＯって顔とか現実と同じだから教室にいた時点で勘付いた人もいたっぽい。さて、次は俺か

「古原謙二です。よろしくお願いします。皆には……んんっ！」

咳払いをし、気持ちを切り替える。この感覚は久しぶりだな

「小次郎、と言った方が分かりやすいかな？これからよろしく頼む」

声はそのままに口調の小次郎の物にする。教室はさっきとは比べ物にならないほどの叫びに包まれた。謙二は手鏡を使っていなかった為最後まで容姿は設定した小次郎のままだったのだ。

自己紹介も終わり、教室も落ち着いたところで、一旦休憩となる。当然俺と綾野さんの回りには人だかりが出来上がる。

「ホントにあなたがあの剣豪小次郎？」

「そうだが？」

「同い年だったのか……凄い……」

そりゃそうだ。和服に身を包んだ侍がふたを開けたらこんなガキなんだからな。俺でもそうなる。手鏡……使っとけば良かったかな？

その日、家に帰るとリビングには珍しく父と母、木綿季と全員が揃っていた。
「どうしたんだ？皆揃って珍しい」
「謙二、私達に隠してたね？差別的な扱いを受けてたこと」
「！」
何故それを!?見れば木綿季が口からペロッと舌を出す。うむ、可愛い……ではなくて！
「喋ったのか？木綿季」
「そんなに怒らないでよ謙二。ちゃんと色々考えた上で話したんだから」
「それってどういう……」
その後聞かされた話に俺は度肝を抜かれた。端的に言うと木綿季を俺と一緒にあそこに通わすという。思わず
「なに考えてるんだ？大体通るわけ無いだろ！そんなの！」
ピラッ
「ん？」
黙って差し出されたプリントを見る。そこには
『古原謙二、心身の都合上古原木綿季との通学及び学校生活を認める』

とあった。ちゃんと学校の印と学長のサインも入っている。つまり正式な書類ということ
「マジか……元の学校はどうしたんだ？」
「辞めたよ」
「は？」
今何て言った？辞めた？特別支援学校を？
「何があったんだ？」
「ははっ、大したことじゃないよ。純粋に行きたくなくなったからさ」
「なんでまた」
「だってボクってＡＩＤＳ持ちなだけで別に発達障害とかないし……はっきり言ってあそこにいるには健常過ぎるんだよ。通うのが認められてもね。それに……」
「それに……なんだ？」
「いい機会だし謙二と学校生活したいなーって」
「それが本音か!?」
「うん！」
隠しもせずに言ったよこの人。ああ、それで
「学校を変わるためにバラしたのか。俺のことを」

「そうだよ。まあ最初から謙二が帰ってきたらなんとしてでも一緒に通うつもりだったし、あの症状が出たのは都合が良かったよ」
「今何て言った!?」
「なんでもないよ。それとね」
「ん？」
「学校がそこそこ遠いからさ、一緒に暮らそっか」
「はいいいいいいいい!?」
　慌てて見るとお母さんは笑ってる。くそっ親公認かよ！
「大丈夫なのか!?俺達まだ中三だぞ!?正気か!?」
「こう見えてボク独り暮らしの経験はあるし、仕送りはあるし、何かあったら行ける距離だし、お母さん曰く良い社会勉強だってさ。謙二と二人っきり・・・ふふっ」
「何か邪悪な笑いが聞こえた気がしたが気のせいだな！うん！お母さん公認なら仕方ないな！」
　もうどうにでもなりやがれ！因みにこのあとお父さんに
「木綿季を泣かせるなよ?それと鈍い男は嫌われるぞ。ついでにもうひとつ」
　幾ばくかの間をおいて
「恋に目覚めた女は例えるならブレーキの壊れたダンプカーだ。気を付けろよ」

悟った目をするお父さん。思わず

「それ、実体験？」

「想像に任せるよ。ハハッ」

# 事件の匂い、そして帰還

学校が始まって数日が経ち、初めての休日を満喫していた謙二はとんでもないニュースを目にする。
未だに数百人のプレイヤーが帰還出来ず！
つまるところまだログアウト出来ていない人が数百人いるということだ。それを見た謙二は
「匂うな」
「何が？」
「既にＳＡＯサーバーは削除されたはずだ。なのにログアウト出来ないということはどこか別のサーバーに捕らえられていると考えるのが自然だろう」
「で、謙二はどうするつもりなの？」
「決まっている。これはＳＡＯの名残だ。尻拭いは俺達がやる」
「また……やるの？フルダイブ」
「止めないでくれ。これは俺達の問題なんだ」
「……分かったよ。でも怖いからナーヴギアは駄目。アミュスフィアだっけ？なんか

安全なゲーム機があったでしょ？あれならいいよ」
「意外だ。何がなんでも止めると思って心構えをしていたのだが……」
「どうせ止めても意味ないでしょ？」
「よく分かってるな」
「でも約束して。無事に帰ってくること。ちゃんと毎日こっちに戻ってくること。それから……」
「何だ？」
「無事に全部終わったら一緒に遊ぼう？ボクも仮想世界ってのに興味があるんだ」
「分かった。約束だ」

そして数日後、家に届いたアミュスフィアとＡＬＯと書かれたカセット。両親の説得には苦労した。木綿季が味方になってくれなかったら駄目だったかもしれん。届いた荷物を見た木綿季が、
「何でＡＬＯを選んだの？」
「未帰還のプレイヤーはレクトという会社が管理しているそうだ。で、レクトが関係する会社が運営している唯一のゲームがこのアルヴヘイム・オンライン、通称ＡＬＯだ。怪しさ満点だろう？まずはこのゲームで情報を集めようと思う」

「なるほどね」
「じゃあ、早速行ってくる。御飯までには戻る」
「気を付けてね」
部屋に向かう謙二を見送る木綿季。後ろに回された両手には何やら輪っかのようなものが握られていた。

自室に戻った謙二はセットアップの準備を進める。ベッドに横になり、アミュスフィアを被る。ナーヴギアと違い天使の輪のような機械だ。目のところは半透明になっている。
「さて、この言葉を言うのは二年ぶりか、行くぞ！」
リンクスタート！
まばゆいカラフルな光が自分を包む、だんだん薄れる体の感覚。それはまさしく二年前に味わったそのままの感覚だった。
ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ＡＬＯ
「そういえばＳＡＯの時もこんなだったな」
まずは初期設定。何故か［続きから］というのがあったが

「怪しいな。触らぬ神に祟り無し」
躊躇なく［始めから］を選んだ。
『ではまずプレイヤーネームを決めましょう！』
「プレイヤーネームは……当然」
［ＫＯＪＩＲＯ］
『その名前は既に使われています』
「なぬ!?」
まあ有名な名前だ。使われていてもおかしくない。
「ならば！」
［ＫＯＺＩＲＯ］
『その名前は既に使われています』
「ぐぬぅ！仕方無い。この機会に新しいオリジナルの名前を考えるか……」
結局悩み抜いて決めた名前が
［ＫＯＨＡＲＵ］
古原だからコハル、安直である。
『次に種族を決めましょう！』
「よし！行けた！」

元気のいいナビゲーターの声を聞きながら種族を選ぶ。どうやら種族によって色々ステータスに違いがあるらしい。小一時間悩んだ結果、
「これだな。闇妖精属（インプ）、光が無くても飛べるし暗視能力もある。行動範囲が広いのは良いことだ」
技でもどうにもならないステータスを重視した謙二は水中でも活動できるウンディーネと暗闇でも飛べるインプで悩んだ末インプにすることにした。

『ではＡＬＯを心行くまでお楽しみください！』
光に包まれ気が付くと何やら薄暗い街にいた。
「おお、これは……」
明かりは一つもない。だが暗視能力があるお陰かちゃんと景色は見える。
「どれ、操作性はっと」
シャララララン
「うむ、ＳＡＯと大差無いな。武器は…片手剣一本か、店には何がある？」
暫く探索した結果
「刀は…ある。スキルでも何でもなく、ただ物し竿に慣れた身としてはどれも短くて

軽くて扱いにくい。まあ扱えない訳ではないが」
「まずはレベリングだな。そして金を稼がなくては」
そしてフィールドへの一歩を踏み出そうとした瞬間
『外部からの接触があります』
赤い緊急メッセージが流れた。何事かと時計を見ると
２０：００
「やっべえええ！時間見てなかった！」
慌ててログアウトする謙二、目を冷ますとそこには木綿季が立っていた。怒りの表情で。
「今……何時かな？」
「すいませんでしたぁぁぁぁぁ!!!!!!」

なんとも言えない空気の中ご飯を食べる。味がしない。分からない。すると
「ねえ、心配したんだよ？」
「すいませんでした」
「次からは気を付けてね？でないと今度は強制的にアミュスフィア剥がすから」
「ハイ……」

その後ＡＬＯから現実にメッセージを送れることを知り、どうしてもというときはそれで知らせることに落ち着いた。

一方その頃

「ぐぁあ！」

ドサッ！

「痛てぇ。ここはどこだ？」

一人の黒い剣士が妖精の世界に降り立った。

# 準備

「さて、まずはレベリングだな。最低限戦えるだけの力を持たなくては」
木綿季に絞られた為、ちゃんと時間になったら知らせてくれるタイマーを仕掛けてＡＬＯにログインしたコハル。
「さて、今の私でどこまで行けるか……」
身近なモンスターに狙いを定める。レベル的に所謂初心者向けのモンスターだろう。慣れ親しんだあの構えを取る、
「秘剣、燕返し」
シュパシュパシュパ！
パシャァァァァン！
「むう、衰えたか……」
技があっても体のステータスが追い付いていない。本来は三発同時の燕返しだが、三連撃になっていた。
「最低限のステータスと武器を揃えるのが目標だな。この剣で燕返しは出せはするが出しにくい。やはり物干し竿かそれに準ずる刀が欲しいところだ」

とにもかくにもレベルと金が足りない。時間の許す限りコハルはレベリングに勤しむのであった。

そしてそれから数週間。ゲームの時間が思うように取れなくて時間はかかったが満足の行くレベルに達したコハル。金もある程度は貯まった。

「では、武器の調達だな。武器といえばレプラコーンとか言う種族が武器製作に長けていたはず。だがここはインプの領土、ここに居ては会うことは出来ない。確か世界樹の麓に中立都市があったはずだ。そこに向かおう。名前はアルンとか言ったか」

アルンを目指すことにしたコハル。だがＡＬＯにテレポートと言った便利な機能はない。オープンワールドをひたすら飛ぶしかないのだ。しかし飛行時間には制限があるため一回の飛行では辿り着けない。その為飛んで着地してはレベリングを繰り返した末

首都アルン

「到着だ！」

一度に取れるゲームの時間が短いせいで二日掛かったが何とか辿り着くことができた。

「まずは情報だ。良い武器屋を探さなくては、その為には優秀な情報屋もいる」
　回りの人に聞いたところ鼠のアルゴという情報屋が好評だそうだ。まさかな……
「行ってみないと分からない。もしかしたら同姓同名かもしれん」

「ヨッ、何か用カ？」
「ははは、いやはや、ははは」
「何ダ？用がねえなら帰るゾ？」
　ホントにあのアルゴだよ。髭のペイントも健在だ。ケットシーの猫耳と尻尾が大層似合ってる。可愛い。
「いやなにここいらでオーダーメイドができる武器屋を探していてな。刀が欲しいんだ」
「ほう、ならここがいいだろウ」
　送られるマップデータ。そこには
　［リズベット武具店］
　とあった。思わず
「運命とは・・・面白いものだ。ここまで一致するか」
「何のことダ？」

「いや、以前今と全く同じ状況を味わったことがあってな。あのときのアルゴは怖かったぞ？」
「ん？……オメェ……誰ダ？」
「名前もアバターも違うからな、分からんのも無理は無い。ではこれでどうだ？私が欲しいのは長い大太刀、ソードスキルを使わない」
「……まさか！」
「はっはっは、久し振りだな。元気そうで何よりだ」
「小次郎か！何で名前変えたんダ!?」
「既に使われていてな、これを機会に自分オリジナルのプレイヤーネームを考えたのだよ」
「まあ小次郎って結構有名な名前だからナ」
「ああ、それとアルゴに聞きたいことがもうひとつ」
「何ダ？」
「未帰還のＳＡＯプレイヤーについて何か知らないか？」
　すると顔が明らかに暗くなるアルゴ
「あくまでも推測何だがナ、この画像を見てくレ」
　見せられた画像には見覚えのある、キリトの最愛の人物アスナさんがいた。だが

「これは……鳥籠？それに服装も」
「これがアーちゃんと決まった訳じゃ無いけど有力だろウ？まあこれ以外に証拠らしい証拠は無いけどナ。現実でも出来る範囲で調べた結果今のところこのＡＬＯが一番怪しいんダ」
「やはりか、だが武器を揃えたとしてどうすればいいんだ？」
「グランドクエスト……だナ。あれが相当理不尽な難易度らしい、端からクリアさせないと思える程の難易度だそうダ。何かあるんだろウ」
「分かった。取り敢えずはレベリングだな。ところで情報料は？」
「ＳＡＯの頃からの客だからナ。この程度の情報タダでやるヨ」
「恩に着る」

「おお、見覚えのある看板だ」
　コハルは首都に店を構えるリズベット武具店に来ていた。
　ガチャ
「いらっしゃいませー。リズベット武具店にようこそ！」
　出迎えたのはピンク色の髪をしたレプラコーンの女性、リズベットだ

「ははっ何一つ変わっていないな」
「冷やかしに来たんですか？」
「おおっと、いかんいかん。武器のオーダーメイドをお願いしたい」
「要望は？」
「刃渡り２ｍ程の刀だ。物干し竿と言えば分かりやすいかな？あれは良い刀だった」
「物干し竿を知ってる？でもあれを作ったのはＳＡＯの頃……あなたは？」
「名前もアバターも変わったから信じて貰えないかもしれないが、ＳＡＯの頃は小次郎と名乗っていた」
「ホントに!?」
「ああ、物干し竿は君が徹夜で休まず目の下を真っ黒にして作ってくれた刀だ」
「それを知ってるって事は本物か、分かった、作ってあげましょう。飛びっきりの刀！長さはあれくらい？」
「ああ、だが今回は急ぎじゃない。徹夜までしなくて良いぞ」
「りょーかい。出来上がったら連絡するわ」

　それから数日後、ログインしたコハルに出来上がったというメッセージが届く。店に向かうとそこには

「お待ちどうさま。素材から厳選したせいで時間がかかっちゃった。私の自信作よ！」
テーブルに鎮座する一振りの刀。とても長く、鍔がない。
「銘は同じ、物干し竿よ。振ってみて」
シャラン
小気味良い音を立てて抜かれる刀身、美しい波紋が広がっている。軽く振ってみて
「素晴らしい。最高の出来だ。これ以上はない。値段はいくらかな？」
「うーん。１０万ユルドで！」
「私としては倍出しても良い。それくらい良い出来上がりだ」
「そうね。なら・・・・見せてくれない？あなたの燕返し。一度も見たこと無いのよね」
「見せてもいいが場所は？」
「裏に試し切りのスペースがあるからそこで」
店の裏には槍も振り回せそうな広いスペースがあった。ターゲットの案山子も置いてある。
「特とご覧あれ。これが私の唯一無二の剣技」
いつもの様に左足を軸に右足を下げて刃先を上に構える
「秘剣」
「燕返し」

ヒュオ！

十分なステータスと武器から放たれた燕返しは三発同時の真の燕返しであった。消し飛ぶ案山子が威力を物語る。

「凄い……これが……」

「満足していただけたかな？」

「ええ、十分。ありがとう」

見せ終わったコハルは背負った鞘に刀を納める。その後ろ姿はまさしくアインクラッドにいた侍の後ろ姿であった。

# 合流

「さて、どうしようか。まずはキリトと合流しよう。あいつのことだ。間違いなくログインしてるはずだ」

リズベット武具店で武器を調達したコハルはアルゴにキリトの居場所を聞く、すると

「ふむ、奴は既にここ、アルンに到着していたか、一歩遅かったな。それにもうグランドクエストにも挑んだだと!?だが失敗したのか。あいつでさえ駄目となるとクリア出来る奴はいなさそうだな。まあ取り敢えず合流だ。どんな風に声を掛けようか……」

幸いキリトはログインしているらしい。アルゴのメッセージの場所に行くと

「おっ、いたいた。相変わらず真っ黒だなあいつ。それに側には金髪の美女!?お前!アスナさんはどうしたんだ!?」

真っ黒なキリトの横にはシルフの女性プレイヤーがいた。

「よし、剣で語り合うか。その方がサプライズになるだろう」

キリトに近づくコハル。向こうも気がついたらしい。

「何か用か?」

「あなたがキリトですか?」

「はい、そうです」
「何でも素晴らしい剣の腕前をお持ちだとか？」
「まあ、それほどでも……」
流石のキリトも名前もアバターも変わった今の自分には気がつかないらしいな
「もしよければ手合わせしていただけませんか？」
「いいですよ」
あっさり受けるキリト。選ばれた決闘モードは全損決着、実際に死ぬわけではないＡＬＯではこれがポピュラーなのだ。
「しかし、ここでですか。まあ場所はどこでも良いですが人目に付きますね」シャラン
3
「街中ですまない。しかし、長い刀だな。あいつを思い出すよ」
2
「あいつが誰だか知りませんが本気で来てくださいね？」
1
「当たり前だ。誰が相手でも手は抜かない！」
ピーッ！
「ぜあぁ！」

うん、相変わらず早いな、キリトは。というか早すぎないか!?

ギン！

「おわぁ！ととっ！」

早いだけじゃない。重い……

ガキャン！

「その構えの無い、でも刃先だけは整ってる剣技、お前は……もしかして！」

その驚愕が命取りだった。

「隙を見せたな！キリト！」

即座にあの構えを取る。

「その構えは!?」

「秘剣」

「燕返し」

ヒュオ

ズガァァァァァァン!!

凄まじい音、モロに食らったキリトは宙を舞い

パシャァァァァァン！

砕け散った

　その後そばにいたプレイヤーに蘇生してもらい残り火から復活するキリト。
「やっぱお前小次郎だろ？あの剣技使えるのお前だけだからな」
「はっはっは、良い再開だなキリト。だが小次郎という名はもう捨てた。ここにいるのはインプのコハル。ただの棒振だ」
「あれが棒振なら俺は何なんだ……」
「それはそうとキリトよ。こちらの女性は？もしやアスナさんというものがありながら浮気か？」
「違うわ！その……」
　チラッと横を見るキリト。頷かれたのを見て
「リアルでは妹のリーファだ」
「ほう、お前ボッチだと思ってたら妹がいたのか」
　羨ましい！俺だって可愛い妹の一人や二人……うぅ？何やら寒気が……リーファと呼ばれたプレイヤーは
「どうも、リーファです」
「コハルだ。あなたの兄の所謂戦友？になるのかな。よろしくリーファさん」
「よろしくコハル」

一通り挨拶を済ませた俺はキリトに向かって
「良かった良かった。妹さんだったのか。ことと次第によってはアスナさんに報告しないといけないところだった」
「アスナ……」
おや？一気に暗くなったな。これは当たりか？
「やっぱりアスナさん……このゲームに？」
「ああ、お前はあの画像は？」
「鼠に見せてもらった。今お前の反応で確信したよ。良かった、当たりで」
「知らずに来たのか？じゃあお前はなんでＡＬＯに？ＶＲゲームなんてごまんとあるのに」
「未帰還者の管理はレクト、そのレクトの関係する会社が運営してる唯一のゲームがＡＬＯだからな」
「なるほど、俺はリアルでエギルに教えてもらったんだ」
「なるほどな」
そこから俺はキリトと情報交換をした。既にグランドクエストに一回挑んだこと。おかしいレベルの難易度で関係する他の弱体化クエストのようなものがないことから恐らくクリア不可能なクエストだということ。それを聞いた俺は

「無理ゲーじゃねえか！なあ、別にアスナさんは持病とか無いんだろ？無理に俺たちが解決しなくてもいいんじゃね？」
「そのことなんだが……」
　そこからの話は聞くに耐えかねる話だった。早い話が大人の力を使って強引にアスナさんを寝取られる寸前らしい。厄介なのは親公認だということ。本人に意識が無いため拒否も出来ないということ。本人に意識が無いうちに籍も入れて逃げられなくするつもりらしい。だが
「何故そこまで詳しく知ってるんだ？」
「ガキは指咥えて見てろって堂々と喋ってくれたよ。本人が」
「それは誰なんだ？」
「須郷だ。レクトのフルダイブ技術研究部門の主任でアスナと結婚してレクトを乗っとるつもりらしい。でも俺以外には猫被ってて俺の意見程度じゃ大人は動いてくれない」
「うーむ、聞いた限りだと素晴らしい程の完全無欠の外道だな」
「なんとしてもあいつを止めないと！なあ！小次郎！協力してくれ！」
「嫌だ」
「何で⁉」
　怒るキリト、まあ当然の反応だろう。

「小次郎はあの鋼鉄の城にいた侍の名だ。ここにいるのはただのコハルだよ？」
　それを聞いたキリトはほっとした表情で
「じゃあ、コハル。アスナを取り戻すために、協力してくれ！」
「応とも！」

「ところでキリト。気になってたんだがその随分豪華な装備は？一体どこからそんな金が？」
「？このゲームはＳＡＯサーバーをコピーして作られてる。ＳＡＯにいた頃のデータが残ってたんだ。そのお陰で大量の金が貯まってるんだよ。お前は無かったか？続きからってやつ」
「あったが無視した。地雷の臭いがしたからな。じゃあ小次郎の名前が使えなかったのは・・・・・」
「このサーバーにあの時の小次郎のデータが残ってたからだろうな」
「ぐぬう。まあ強くてニューゲームは俺の好みじゃない。多分知ってた上でも選ばなかっただろう」
「そういうとこお前らしいな」

あらかじめ伝えていたとはいえあまり木綿季を待たせるのも不味い。ある程度話をしたところでキリトとは別れてログアウトした。どうやらご飯を食べずに待ってくれていたらしい。
「すまん。待たせた。先に食べてて良かったのに」
「いいのいいの、ボクが待ちたくて待ってたんだから。で、どんな感じ？」
「ＳＡＯ時代の仲間と合流した。どうやらＡＬＯが当たりだったらしい。多分今後ダイブする時間が増えるかも」
「気にしないで。部屋に行けばそこに謙二はいるし、寂しくは無いから」
「本当にすまん。これが解決したら一緒に遊ぼうな」
「うん！約束だよ！」

同時刻、ＡＬＯ内、世界樹最上部
「ハッハッハッハッハ！モルモット（ＳＡＯプレイヤー）のお陰で研究は順調だ！」
高らかに笑う一人の男。その背中にはどの種族とも違う羽が生えていた。
「姫も既に私の手の中に……ガキどもは私には手を出せない！あの少年の怒りの表情ときたら……実に……良い！」
男はテラスに出る。眼下には多くの妖精達が蠢いている

「虫けら供よ！平伏せよ！この私こそが……真の……」

バサリとマントを翻らせて両手をＹの字に掲げる。

「神だぁぁぁぁぁぁ!!!!フハハハハハハハハ!!!!」

# 作戦会議、そして……

翌日、首都アルン
「で、どうするかなんだが」
集まったのはかつてあの鋼鉄の城を駆け抜けた仲間達
「まずはありがとう。まさかここまで集まってくれるとは思わなかった」
集まったのはキリトとリーファ、コハルを始めとして、リズベット、エギル、クライン、シリカといったいつもの面子
「あのグランドクエストに秘密が隠されてると思うんだが……」
「なあ、キリト。この中で挑んだのはお前だけだ。具体的にはどうだったんだ？」
「一体一体がボス級のガーディアンが無限湧きだ。ゴールに近づく程増えていって半分ほど上った辺りでは敵で前が見えなくなる程だった」
「弱体化クエストが無いとなると正面から打ち破るしかないか……」
暫く考え込む全員。ふとコハルが
「なあ、全種族が力を合わせたら駄目なのか？一応ここにはウンディーネとプーカを除く全種族がいるわけだが……もしかしてグランドクエストは単一の種族じゃないと

挑めないとか？噂じゃクリアした種族がシルフになれるとかなんとか」
　それを聞いたキリトの目が輝く
「確かに前はリーファと挑めた。多分単一の種族じゃなくても行ける。だとするとなおさら怪しいなあれ。もし複数の種族が一緒にクリアしたらどうするんだ？」
「おい、キリト。そうだとしたらこれは最悪も想定しないといけないな」
「というと？」
「そもそもガーディアンを凌いだ所でなにもないただの行き止まりとか？誰も到達してないんだからその先を作ってなくても分からないだろう？」
「でも、それ以外に無いんだよ！」
「はっはっは、ならしょうがないな。出来る限りの協力はしよう。みんなは？」
「「任せろ！」」

「と、言ったはいいもののどうすればいいんだ？特にバトルジャンキーのサラマンダーに協力とか無理だろ？どうだ？クライン」
「無理だな。サラマンダーは脳筋だらけで協力とか死んでも無理だ」
「となると全種族というよりは一部の種族で行くか。領主の説得もしないとだし……」

「そのことなんですけど……」
「ん？どうしたシリカ」
「ケットシーってテイムが一番上手なんです。噂じゃ騎竜部隊とか言うのもあるらしいです」
「じゃあまずはケットシーだな。後はシルフか？スプリガンはお世辞にも先頭向きじゃないし、なあコハル、インプは？」
「あまりおすすめしないな。大体暗闇を好む種族だぞ？」
「だよなぁ。じゃあ応援を依頼するのはシルフとケットシーにしよう」
「あっ！その事なんだけど……」
　突然リーファが
「確か近日中にシルフとケットシーの領主同士で会合を開くとか言ってた。そのときに行けば同時に説得出来るんじゃない？」
「おお！名案だな。場所は？」
「アルン高原ってとこ、モンスターが出ないから会合とかによく使われてるみたい」
「よし、日時が分かったら教えてくれ。じゃあ皆。取り敢えずシルフとケットシーの協力が仰げるまでは各自で自由に行動してくれ」
「なあキリト」

「どうした？コハル」
「お前……簡単に言ってるけど説得材料あるんだろうな？」
「勿論！」

それから数日後、キリトから会合の日時が伝えられた。万が一に備えて来てくれとのこと。指定された日に行ってみると神妙な面持ちのキリトとリーファさんがいた。
「どうしたんだ？顔色が優れないじゃないか」
「それなんだけどな……」
何でもこの会合をサラマンダーが襲撃して台無しにしようとしているらしい。大方責任を擦り付けあって疑心暗鬼に陥らせて協力をさせないようにしようって魂胆だろうな。するとキリトが
「なあ、もし俺がサラマンダーから領主を守れば良い交渉材料になるんじゃないか？」
「うまくいくといいけどな。やってみる価値はあるんじゃないか？」
すると遠くから赤い群れが見えた。既にシルフとケットシーは互いに向き合って座っている。
「じゃあ、行ってくる。なんかあったら助けてくれな？」
「頑張れ、キリト」

飛び去るキリト。俺は高みの見物と洒落混みますか。

「双方剣を納めよ!」

おお、よくやるなぁ。というかその設定無理が無いか?キリトよ。ほら、なんか凄そうなサラマンダーが疑ってるよ……ん?今なんて?

「双方剣を納めよ!」

飛び出したキリトはサラマンダーの前に降り立ちそう叫ぶ。だが、大使という設定は流石に無理があったらしくサラマンダーのユージーン将軍に疑われてしまった。

『何とか言い返したがどうしてこうなった!』

ユージーン将軍が大使かどうか確かめると言って戦いを仕掛けて来たのだ。

『３０秒耐えてみろって!?やってやるさ!』

空を飛びお互いに切りかかる。僅かに攻撃はユージーンのが早かった。即座に防御しようとして

スッ

「!?」

剣がすり抜けた。思わず動揺するキリト、そのまま剣はキリトに……

キン!

「キリトぉ、仲間はずれは良くないなぁ。俺も入れてくれないと……」
長い刀がそれを弾いた。見ればコハルがそこにいた。
「誰だ？貴様。貴様も大使だとでも言うのか？」
「はっはっは、俺は通りすがりの棒振よ。強そうな奴がいたから我慢が出来なくてな」
「生憎今はそこのスプリガンと戦っている。後にしろ」
「後ならやってくれるのだな。約束だぞ？」
そう言ってあっさり引き下がるコハル。だが、下がり際に
「気を付けろキリト。恐らくあいつの剣はレジェンダリーだ」
「分かった」

引き下がったコハルはシルフとケットシーに混ざって観戦していた。
「おお、煙幕か。時間稼ぎ？凪ぎ払ったけどキリトがいない、こういうときあいつは大抵……やっぱり！太陽を背に突撃か！でも防がれ……二刀流!?久々に見たぞ！」
一人で盛り上がるコハルを遠巻きに見るシルフとケットシー
「でもあれ、シルフの剣じゃぁ……なるほどな、あの煙幕のうちにリーファさんから剣を借りたのか。ソードスキルが使えなくてもあいつには二刀流の心得がある。勝負あったな」

その言葉通りキリトはユージーン将軍に勝利を納めた。それを見たコハルは笑みを浮かべつつ
「さてと、じゃっ、いっちょ行きますか！」

残り火から復活してもらい頭を下げるユージーン将軍、どうやら上手く説得できたらしい。さて、ここからは
「さてユージーン将軍、やろうか？」
「いきなりだな。まあいい」
「おい！コハル！もう終わったんだぞ!?お前……まさかただ単に戦いたいだけか？ユージーンと」
「うむ、何せキリトとやりあう強者だ。相手にとって不足無し！」
「この戦闘狂が！」
「では早速……セイ！」
切りかかるユージーン。即座に離れるキリト。そしてコハルは刀で受けようとして
キン！
「馬鹿な！グラムをどうやって!?」
弾いた。防ぐことの出来ない剣を一本の刀で

「何、単純なことよ。その剣も実体化させないとダメージが与えられないだろ？大方防ごうとする物が側に来た瞬間だけすり抜ける。ならば当たる直前で刀を下げれば防げるという寸法よ」
「なるほど、それなりに腕はあるようだ」
「そちらこそな！」
　だが、それでもユージーンは強かった。グラムを抜きにしてもその実力は相当なものであり
「フハハハハハハハハ！」
　それに応じるように笑うコハル。しかし
「だがこのままでは決着が付かないぞ？」
「だな、しかし我が秘剣は地に足が着いていないと放てないのだよ。どうだ？受けてみると言うのなら地上に降りないか？」
「遠慮させてもらおう。やりたければ引きずり下ろしてみろ！」
「空中戦は得意では無いのだがな……」
　ヒュイィィン
　おもむろに光を纏うユージーンの剣。ソードスキルを放つつもりらしい
「貴様はソードスキルを使わないのか？」

「不要よ」
「なら‥‥死ねい！」
　繰り出されたのは三連撃のソードスキル。が、
「遅い」
　キンキンキン！
　全て弾くコハル。硬直するユージーンを
「セイ！」
　ズゴン！
　叩き落とした。それはつまり
「ぐぬう、まさか本当に叩き落とされるとはな。しかし何者なんだ？ソードスキルを普通の攻撃で弾くとは」
「鍛練の賜物よ。さて、ここが勝負所よな！」
　構えを取るコハル。それにユージーンは
「今まで構えを取らなかった貴様が構えたか。だがソードスキルでは無さそうだな。そんな普通の攻撃が効くとでも？」
「秘剣、燕返し」
　ヒュオ

「んな!?」
驚くユージーン。それもそのはず。連続ではなく同時に三つの刀が襲いかかれば誰でもそうなる。だが
「嘗めるなぁ!」
素早い剣裁きで二つを弾く。が、
ザシュ!
「ぐあ!」
吹き飛ばされるユージーン。だが生き残った。
「素晴らしい剣だな。だが生き残ったぞ!」
そう宣言するユージーン。だがそれがいけなかった。彼はいつもの癖で強い攻撃の後はそれなりの硬直があると思ってしまった。だが燕返しはソードスキルではない為
「秘剣、燕返し」
ヒュオ
パシャアアアン
決着、隙を見せたユージーンに第二の燕返しがマトモに当たった。

# グランドクエスト攻略

　コハルとの戦いを終え再び蘇生してもらうユージーン。どうやら魔法で蘇生させられるほどシルフの領主は魔法に優れているらしい。復活したユージーンは
「強さは本物だな。だが貴様は本当に大使なのか？」
　まだ疑っていた。当然だ。出任せなんだから。するとユージーンの側にいたサラマンダーの一人が
「そこの黒いやつ、ウンディーネと一緒に居たのを見たぞ」
「本当か？だとしたらここで事を起こすのは得策じゃないな。シルフとケットシー、スプリガンにウンディーネを相手にするのは不味い。今は去ろう」
　大勢のサラマンダーを引き連れて退却するユージーン。ユージーンに意見したサラマンダーはこっちに向かってウィンクをしていった。
「なあ、キリト。あのサラマンダーと何かあったのか？」
「……ちょっとな」
　言えるはずがない。以前襲われた時に殺さなかっただけでなくドロップ品やらを渡した代わりに情報を巻き上げたなんて。あいつとしてはこれでトントンのつもりだろ

う。すると
「助けてもらってすまないが、君達は？」
シルフの領主が聞いてくる。見ればケットシーも不振な目で見ている。まあいきなり他種族があんなことをほざいて助けに入ればそうなるよな。
「俺はキリトと言います。実は・・・・・・・・」
カクカクシカジカ、マルマルウマウマー

「つまり？自分のグランドクエストの攻略を種族単位で手伝って欲しいと？」
「はい、そうです」
流石は領主になるだけのことはある。終始主導権は領主にあった。
「まあ元々我らはケットシーと同盟を組んでグランドクエストに挑むつもりだったから別に構わないのだが・・・・」チラッ
「君は私たちに何を払えるのかにゃ？」
二人の領主に詰め寄られるキリト。だがキリトは堂々として
「まずは護衛も録にいないあなたたちを助けたこと。俺の目的は世界樹の上に行くことだから報酬は全部そっちに渡すこと。そして・・・・・・・」
ドサッ！

「軍資金はこっちが用意する。そちらにとっても、悪い話では無いと思いますが？」
　おいいいいいい!!!!キリトてめえどっからそんな大金を!?確かにそいつは最強の交渉材料になるわな。しかしどっから調達したんだ？あっＳＡＯの頃のデータか。あいつ録に金使わなかったからな。
「おお、これだけの資金を・・・・・・本当に使わせてもらっていいのか？」
「はい、全て差し上げます」
　互いに見つめ合う領主。そして
「よかろう。シルフは全力で協力しよう。そっちは？」
「断る理由が無いヨ」
「ありがとうございます！」
　ここにシルフとケットシーのグランドクエスト攻略の同盟が締結した。最も当初の予定とは異なる内容だが。一通りの手続きを終えたところでいきなりケットシーの領主がキリトに抱きつき
「所でさ～。君随分強いじゃないか～。ねえ、うちの傭兵（ケットシー）やらない？三食昼寝付きだよ～」
「なっ！卑怯だぞ！我がシルフにも欲しいぞ！」
　さいなら～。痴話喧嘩は他所でやってくれ。キリトに落ち合う場所をメッセージで

伝えた俺は静かにその場を後にした

翌日。首都アルン

「で、あの後どうなったんだ？」

「リーファが止めに入ってくれてな。しっかしサクヤさんもアルシャ・ルーさんも凄い人だった」

「おや？これはアスナさんに通報案件かな？」

「や！め！ろ！」

「はっはっは、冗談に決まってるだろ。で、結局どうなった？」

「想像以上の大事になってる。武器製作にレプラコーン、素材集めにノームとほぼ全種族が関わってる」

「まあ結果よければだろ？攻略はいつになりそうなんだ？」

「来週だってさ。何か俺一人のためにこんなことに……申し訳ないな」

「何を言ってる？グランドクエスト攻略は全プレイヤーの悲願だぞ？お前はきっかけになったに過ぎない。それにお前一人じゃない。全ＳＡＯ帰還者の為、だろ？」

「そう、だな。そうだよな！ありがとう。コハル！」

「感謝される様な事はしとらんよ。では、俺も出来る限りの事をするか」

「何をするんだ？」
「それは見てからのお楽しみということで」

決戦当日、感情が隠せないＶＲゲームにおいてキリトの顔は真っ青だった。
「どうした？キリト。この期に及んで怖じ気づいたか？」
「あ、ああ、あれを見れば誰だってこうなる。まさかここまでの規模だなんて……」
キリトの目の前には数十のプレイヤーがひしめき合っていた。どれもレジェンダリーには及ばないが最高の装備をしている。そこにキリトに近づく者が二人。領主のサクヤさんとアルシャ・ルーさんだ。どちらもゴリゴリの戦闘装束に身を包んでいる。
「さて、シルフの誇る魔法部隊と」
「ケットシー取って置きの騎竜部隊だヨ」
「まあこれだけの規模の装備だ。君からもらった軍資金だけじゃなくてシルフ、ケットシー、ノーム、レプラコーン全ての財布はすっからかんだ。もう後には引けないぞ？」
「わ……分かってます」
「指揮は君に……無理そうだな。大丈夫か？」
うーむ、すこぶる不味い。まさかキリトがこうなるとはな。ここは一つ
「おい！キリト！ヒースクリフの時を思い出せ！あんな大博打を打つ勇敢なキリトはど

こ行った!?」
俺の叫びに思うところがあったのだろう。明らかに目の色が変わるキリト。よしよし、それで良い。お前はいつだって英雄なんだからな。
「あ、ああ!すまない!やってやるさ!」
おもむろに飛び上がるキリト。皆の注目が集まる。
「まずは感謝!これだけの人数が集まってくれるとは思っていなかった!では、グランドクエスト、勝つぞ!」
「「「応!!」」」
皆が叫ぶ。これだけの規模の、しかも他種族混合の攻略が今まであっただろうか?
「攻略、開始!」

世界樹の中に突入した面々はそれぞれ散開し
「まず一番槍は貰うぞ!魔法部隊。攻撃開始!」
「「「……!」」」
魔法に疎い為何を言ってるのか分からないが全員が一文字のズレも無く詠唱する。かなりの長さな所を見ると最上級の攻撃魔法なのだろう。入ったばかりでまだこちらに向かってきている段階のガーディアンが

ズン！

消えた。圧倒的な風魔法は襲いかかるガーディアンを一時的にだが全て消し飛ばす。

「行け！」

俺とキリト、リーファの体が光る。どうやらサクヤさんがバフを掛けてくれたらしい。

「行くぞ！」

それこそロケットかと思う速度で昇る。だが無限湧きというのは本当なのだろう。半分を過ぎたところで視界を多い尽くすガーディアンの群れ。だが

「騎竜部隊！ブレス！ぶっぱなせ！にゃー！」

アルシャ・ルーの号令の元これまた凄まじいブレスの援護射撃。回りに群がろうとするガーディアンを消し飛ばす。一度に放たず段階的に撃ってくれているお陰で中々群がれない

「よし、行けるぞ！」

そうキリトが叫んだとき目の前が開けた。何とかガーディアンの湧くポイントを突破出来たらしい。後ろから追いかけてくるもバフ込みの飛行速度に追い付けない。目の前には巨大な門がそびえ立つ。悠々と門までたどり着いたときキリトが悲鳴を上げた

「嘘……だろ？」
「どうした？何があった？」
「開かない」
「何!?」
　キリトのナビゲーションピクシー曰くＧＭ権限で閉まっているらしい。つまりこれは……
「元々攻略不可能ってか？まあいい、動画は撮影済みだ。これを持ち帰るだけでもここまで来た甲斐があったってもんだ」
「それじゃダメなんだ！アスナが！」
　キリトの手には一枚のカード。何でも世界樹から降ってきたとかなんとか。
「パパ！」
　何い!?今この妖精何て言った!?パパだと!?
「確かに普通のプレイヤーは入れませんが、このカードと私の権限で入れそうです！」
　あらやだ、この子優秀じゃない？でも、ナビゲーションピクシーってここまで優秀だったっけか？
「どれくらいかかる？ユイ！」
「少なくとも後十数秒は欲しいです！でも……」

見れば迫り来るガーディアン達。仕方ない
「しゃーないな。ここは俺ｇ」
「私がやる」
俺を遮ったのはリーファさん
「どういうつもりだ？」
「コハルとお兄ちゃんはＳＡＯ時代の戦友でしょ？この事件、二人で解決してきなよ。私でも少しの時間稼ぎ位できる！」
「……分かった。恩に着る」
「開きます！パパ、手を……」
「おい！コハル！手を出せ！」
シュン！
キリトの手を取った瞬間光が俺たちを包んだ。転移する瞬間に見えたのは数十のガーディアンに相対するリーファさんの姿。後で何かお礼をしないとだなぁ

カンカンカン
転移を終えた俺たちはひたすら走る。本来ならば最上級の妖精、アルフの住まう空間が広がっている筈のそこは無機質な白い廊下、まるで研究所の様だった。

「こりゃあ真っ黒だなキリト」
「ああ、ユイ！アスナは？」
「ママはこの先を右に曲がって真っ直ぐのところです！」
「よし！」
　ひたすら走り抜ける。途中何やらとんでもないものが見えた気がするが脇目も降らず走り抜ける。すでに目的の場所であろう鳥籠が見えている。キリトは駆け寄りロックを外す。これで感動の再開……とはならず、そこには鎖で縛られたアスナさんがいた。
「なっ！アスナ！これは!?」
「キリト君！来てくれたんだ！」
　おいおい、あからさまに縛られてる救出対象。でも近寄れる。罠の臭いがぷんぷんするぞぉ
　その時辺りが真っ暗闇になる。インプでさえも見渡せないほどの暗闇。更に
「ぐぬぅ、これは!?」
　体が突然重くなり地に伏せる。その時
「フハハハハハハハハ!!!」
　高笑いが響き渡る。暗闇が少し晴れる。そこには

「おや？おやおやおやおや」
「あれれぇキリト君だけじゃなくてもう一匹虫が紛れ込んだみたいだねぇ」
「残念ながら小さな虫はとらえ損ねたが……どうだい!?近日実装予定の重力魔法の威力は！」
明らかに他と異なる翼。これ見よがしに乗っかっている王冠。なるほど、こいつが
「どういうつもりだ！須郷！」
「んんー？ここでは……妖精王オベイロン様と……そう呼べ！」
どうやらあいつが須郷らしい。しかし醜悪な見た目だ、須郷と呼んだキリトは持っていた大剣を腹に突き刺される。
「なんだい？その反抗的な目は……システムコマンド、ペインアブソーバをレベル8に！」
「ぎゃあああああああ!!!!!」
響き渡るキリトの悲鳴。先程まで無かった体の痛み、なるほどペインアブソーバ、か
「んんー？まだレベルを2下げただけだよぉ？この程度で降参かい？黒の剣士の名が鳴くねぇ！」
「うぎゃあああ！」
突き刺した剣を捻るオベイロン。どうやら苦しめたいらしい。しかしこのままでは

不味いな。どれ
「えっと、妖精王オベイロンと言ったかな？」
「なんだい？虫」
　おっ聞いてくれた。ありがたやありがたや。では、遠慮無く
「あなたは全ての妖精の頂点に立つ者。そういう認識で良いですね？」
「ああ！そうだとも！」
「更に言うとこのＡＬＯのＧＭでもある。間違いないですね？」
「ああ！そのとおりさ！」
　おだてられて舞い上がる。煽り耐性は無さそうだな
「もし王だと言うのならばそのカリスマでもって俺たちをひれ伏させてみたらどうだ？そんな魔法に頼らないでさ」
「なにい？貴様・・・・・」
「まあそれが出来ないからＧＭ権限でもってひれ伏させるしか無いのだろう。それに・・・・」
　幾ばくかの間を開けて
「大人の嫉妬は醜いぞ？オベイロン、いや須郷とか言ったかな？」
「貴様ぁぁぁぁ!!!!貴様貴様貴様、貴様ぁぁぁぁ!!!!」

叫ぶオベイロンはおもむろに俺の背中に手を当て
「貴様には死すら生ぬるい苦痛を与えてやろう！」
大袈裟に叫ぶ。そういうところが甘いと言うのだ。オベイロン！
グサッ
「ぎゃあああああ!!!!!!!」
オベイロンが行ったのはあくまでも重力魔法、多少は動ける訳で、つまり何が起こったかと言うと
「仕込み武器だと!?卑怯者めがあああ！」
「ペインアブソーバのレベルを下げたのが仇になったなオベイロン」
俺が使ったのは返しの沢山付いた小さな杭。袖口に仕込んでおいた物で突き刺さると抜けないばかりか動く度にぐちゅぐちゅと傷口を抉る。小さいため抜くのは困難を極める。普通なら耐え難い不快感で済むが
「ああああああ!!!!僕の腹がああああ!!!!」
腹に突き刺さったそれは中々抜けない。更に言うと俺はこいつに毒を塗ってある。痛みが倍増する類いの毒をだ。それを見たキリトは
「敵に同情したのは初めてだ。えげつないなお前」
ドン引きしていた。そして制御が疎かになったのだろう。解除される重力魔法

「なあ、おいオベイロンとやら」
「ああああああああ!!!!!!!!くそっ！システムコマンド！ペインアブソーバをレベル１０に！」
たまらずペインアブソーバの設定を戻すオベイロン、つまりそれは
ズプッ
「おい、須郷、散々やってくれたな！」
キリトの復活を意味する。引き抜いた大剣を構えてオベイロンに近寄るキリト
「小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はＯＫ？」
その形相は怒りで満ちていた。対して泣き顔のオベイロン。これではどっちが悪役か分からない。
「さあ、お前の罪を……数えろ！」

# 真の帰還

「さあ、お前の罪を……数えろ！」
「ヒィィィィィ!!!ヒィィィィィ!!!」
　怒るキリトを前に完全に戦意喪失のオベイロン。おっと、
「まあ待て、キリト。少し時間をくれ」
「なんだ!?」
「こいつに用があるんだよ」
　おもむろにオベイロンのそばに行き話しかける
「なあ、自称神のオベイロン様」
「な、なななななな何だ！」
「このサーバーってＳＡＯのを丸パクしてるんだよな？」
「ああ、そそそうだ！」
　メニューを操作しながら話し続ける
「カーディナルってご存じかな？」
「勿論知っている！サーバーの維持管理のＡＩだろう？」

少し調子を取り戻したらしく堂々とした態度が戻るオベイロン
「そのカーディナルって完全独立でＧＭでさえも手が出せないってご存じかな？」
「何が言いたい！？」
「まだ分からないのか？ほれ」
コハルがオベイロンに見せたのはある画面。そこには
『カーディナル捜査依頼ページ』
「何だ！これは！僕はこんなの知らないぞ！」
「知らないだろうな。こんな茅場の置き土産をな。実はこれは疑わしいプレイヤーをカーディナルが独自に捜査して何らかの違反が認められたら制裁を下すシステムなんだよ。チーターとかの対処によく使われてるんだ」
「ま……まさか！？」
青ざめるオベイロン。
「気がついたらしいな。そう、お前は神を名乗りながら１プレイヤーとしてＡＬＯに存在する。カーディナルの捜査対象になっちまうよな？」
「だが！僕はこのゲームの創造主だ！カーディナルであろうと創造主には逆らえない筈だ！」
「おいおい、勘違いはよせ。お前はおこぼれを貰っただけだろう？茅場のな」

それを聞いてプルプル震え始めるオベイロン。おもむろに立ち上がり
「茅場あああぁぁぁぁ!!!また!またお前かあああ!!!いつもいつも!お前は僕から全てをかっさらっていきやがる!!!天才だからっていい気になりやがってええええぇぇぇ!!!」
「それが本音か」
コハルがそう言った瞬間
『プレイヤーＩＤ　妖精王オベイロンに深刻な規約違反を発見。ＧＭ権限の私的利用、特定個人のＶＲ環境への監禁、その他複数の違反を確認』
「カーディナル貴様ぁ!神たるこの僕になんと言う口の聞き方を!」
『よってプレイヤーＩＤ　妖精王オベイロンのＧＭ権限を永久剥奪及びアカウントの永久凍結を開始します』
デゥン!
重い音と共に黒いエフェクトに包まれるオベイロン。エフェクトが収まったそこには
「何!?僕からＧＭ権限を永久剥奪だと!?何故そんなことが!」
手を振り回すオベイロンの姿があった。彼の目の前には一般的なプレイヤーと同じメニューしかでない。今まで出ていたＧＭ専用のメニューは出てこない

「おのれ！おのれおのれおのれ、おのれえええええええええ！」
足先から0と1の細かいポリゴンに分解され消えていくオベイロン
「茅場ぁぁぁぁぁ！死して尚この僕を苦しめるのかぁぁぁ!!覚えてろぉぉぉぉぉ!!!」
シュン！
そして目の前から完全に消え去るオベイロン
「幕切れは興ざめだったなキリト」
「ああ」
「ところで今ＧＭ権限は誰にあるんだ？」
「多分カーディナルだろう。第一本来ならばＧＭ権限はカーディナルが持っているべきなんだ。ＳＡＯの時は創造主がいたから彼がＧＭ権限を手に出来たんだろうな」
「なるほど」
「キリト君!!!!」
気がつくと鎖が消え去ったアスナさんがキリトにルパンダイブしていた。
「待たせたな、アスナ」
「うん、ずっと信じて待ってたんだよ。キリト君」
これ以上ここで見るのは野暮というものだろう。コハルはそう考え一時的にその場を離れた。

それから数分後、キリトに呼ばれたので行ってみるとそこには、
「やあ」
「おま……茅場!?」
白衣姿の茅場が立っていた
「ははは、驚いているようだね」
「何故生きてる!?現実でお前は死んだ筈だ!そう報道もされてたぞ!?」
「ああ、間違いなく現実世界の私は死亡済みだ。だが死因はなんだったか覚えているかな?」
「確か……ナーヴギアの最高出力スキャニング……まさか!」
「ああ、そのまさかだ。私は賭けに勝ったんだよ。最も目覚めることが出来たのはついさっきだけどね」
「じゃあさっきのは?」
「あれに関しては私は無関係だ。完全にカーディナルの仕様だよ。カーディナルはいかんせんやることが多すぎてね。常にプレイヤーを監視できている訳ではないからああやって通報してくれないと何も出来ないのだよ。あの機能をまさか君が覚えていたとはね」

「ははっ、偶然だ」
　暫く話し込む三人。だが、
「すまない。時間のようだ」
「時間？」
「ああ、私は自分の関わった全ての仮想世界に入れる反面一つの世界にいられる時間は短いんだ」
「そうか……」
　すると茅場はおもむろに
「そういえばクリア報酬をまだ渡して無かったね。これをあげよう」
　キリトと俺に茅場が差し出したのは一つの種
「この種は？」
「今はまだただの何の変哲もない種だ。それが芽吹けば世界は広がるだろう。どう使うかは君たち次第だ。では、この辺りで失礼するよ」
　そう言い残して消える茅場。キリトとコハルだけが取り残される。
「おい、キリト。アスナさんは？」
「茅場が現れる前にログアウトしたよ」
「つまりミッションコンプリートと言うことでいいかな？」

「ああ！」
「では帰るとしようか！キリト！」
「だな！」

　その日からの数週間は激動の日々だった。次々と明かされる須郷の闇、最初は全て茅場のせいだと言っていたが部下の一人が自白、最後まで無様に足掻くも須郷には無期懲役が宣告された。仮想空間だからとはいえやったことは紛れもない人体実験。幸いなのは脳ミソを弄くられた記憶を被害者達が持っていなかったことか。そのお陰で残りの未帰還者の社会復帰はスムーズに行われた。だが、良いことずくめではない。全ての報道機関が一斉にフルダイブを批判し始めたのだ。ＳＡＯ事件に続いてのこの不祥事。フルダイブは衰退の一途を辿るかに思われた

　都内、ダイシー・カフェ
「すげえよキリト。見ろよこれ」
「おお」
　エギルことアンドリュー・ギルバート・ミルズが経営するカフェに来たキリトはエギルからとんでもないものを見せられる。

「雑多な個人のサーバー含めてあの種、ザ・シード関連のゲームは数百に昇る。これが茅場の思惑か……」
「まあこんな一大コンテンツ潰すのは惜しいからな」
　衰退の一途を辿るかに思われたフルダイブを救ったのはあのとき茅場から渡された種だった。その種の正体は、基本的なフルダイブ環境の設計図。これとそれなりのサーバーがあれば誰でもフルダイブ環境のゲームやその他のコンテンツを作ることができたのだ。これを知ったコハルとキリトはすぐにネット上にこれを無償掲載した。そのお陰でコンテンツ数は膨れ上がり国としても潰すわけにはいかなくなった。つまりはそういうことだ。
「これにて一件落着か？キリト」
「ああ、ところでエギル。完全にＳＡＯ関連の事件も解決したことだし打ち上げをしないか？ここで」
「願ってもないぜ」

　謙二宅

「かくかくしかじかと、まあこういうことだ」
「マルマルウマウマーっとふむふむ」

一連の事件を解決しのんびり家で木綿季と寛ぐ謙二。すると
ピコン！
「ん？誰からだ？キリト？」
メールには日時と場所が書いてあった。何でもＳＡＯの打ち上げだとか
「どれどれ……よし」
数回キリトとやり取りしたところで
「なあ木綿季、もし良ければなんだが……ＳＡＯ関連のことが一段落したから打ち上げをしようってことらしいんだ。一緒に来てくれるか？」
「勿論良いよ！場所は？」
「東京都、台東区」
「なら行ける距離だね。いこっか」
「ありがとう」

数日後
「ここが会場のダイシー・カフェか……なんというか……」
「入りにくいカフェだね」
「ああ」

渋い見た目のカフェは明らかに俺たちのような子供は似合わない雰囲気を醸し出していた。
「うーむ……お！」
すると向こうの方から一組のカップルがやってくる。男は真っ黒い服装。あの顔は！
「おーい！キリト！」
「お！お前は……誰？キリトという名前を知っててここに居るってことは……コハルか!?」
「ご名答」
「俺より年下だってのは本当だったのか。で、そっちは？」
「ボクは木綿季！よろしく！」
「よろしく」
「なあキリト。見た目がこんなで入りにくいんだが一緒に行かないか？」
「ああ、いいぞ」
ガチャ
四人はドアを開けて入った。しかしそこは
「暗っ！」

真っ暗だった。すると
パーン！パパーン！
「「キリトとコハル！ＳＡＯクリアおめでとう！」」
部屋が明るくなりクラッカーで出迎えられる。
「!?時間通りだよな!?」
思わず驚きを隠せないキリト
「主役は遅れてやってくるもんよ」
「そんなもんかね？」
明るく出迎えてくれたのは見慣れた面々。当然皆私服だ。クラインに至っては仕事帰りなのかスーツ姿だ。
「おーい！遅いぞ三人とも！いや四人!?」
驚くクライン。そりゃそうだ。ここにいる全員……いや、シリカを除く全員は木綿季のことを知らないからな。
「同じクラスのシリカは知ってると思うが……」
「謙二の恋人の木綿季でーす！よろしくね！」
「コハルの」
「恋人」

「「だと!!!!!?」」
驚く面々。そこには謙二も含まれてた
「むぅー、何で驚くのさ謙二」
「いやだって恋人ってそれはそのー、第一俺達は……あー」
急に挙動不審になる謙二。しびれを切らした木綿季は
「えい！」
チュッ
「んな!?」
皆が見ている目の前でキスをした。しかも
「ボクの初めて……だからね」
「；?@＝＃＆ａｍｐ；［：＋（！＆ａｍｐ；@!!!!!」
言葉にならない何かを叫ぶ謙二。それを見た大人組は
「青春だぁ」
「青春だな」
ほっこりした暖かい目で見守っていた。

「うー、あー」

「そろそろ戻ってきてー、謙二ー」
「はっ！俺は一体何を！なにやらとんでもないことをされた気が、夢か!?」
「現実だよ」
「うー」
　顔を真っ赤にする謙二。相変わらずである。木綿季はその様子を堪能し、
「さっ、座ろ。せっかくの打ち上げなんだし！」
「そうだな！」
　空いていた席に座る二人。元々あまり大きくない店ということもあり既にほぼ満席だった。全員に飲み物（未成年はソフトドリンク）が配られたところでおもむろにクラインが
「おーい！キリト！音頭はお前が取れー！」
「ええ!?俺がか!?……んんっ！えー、こうして皆で集まれて本当に良かった。無事にＳＡＯは完全にクリアされた。これも皆のお陰だ。じゃあ……乾杯！」
「「乾杯！」」
「今日はどうだった？」
「すっごく楽しかったよ！皆良い人そうだったね！」

「はっはっは、そうだろう?」
日が暮れたため酒を飲む大人組を置いて子供組は帰ることになった。道中も二人は手を繋いでいる。時折
「ッ!」ギュッ
「大丈夫だよ」
やはりまだ慣れられないらしい。見知らぬ人が側を通るだけで自然と握る手に力が入る。
「すまない。学校じゃ同じ境遇の人だし、さっきのはかなり親しい者どうしだったから良かったけど……」
「気にしないの!まだ人生これからなんだからゆっくり着実に治していこ?」
「ああ、木綿季の優しさが身に染みる……」
「大袈裟だなぁ」
帰り行く二人を夕焼けが静かに照らしていた。

# 絶剣

打ち上げを終えて数日が経ったある日のこと。いつものようにＡＬＯにログインするとキリトからとあるメッセージが届いていた。

『俺のマイホームに来てくれ』

キリトのマイホーム。それはＡＬＯの一連の事件が終わった後、レクトから運営を引き継いだ企業がかつてのサーバーからデータをサルベージして実装したあの鋼鉄の城、アインクラッドにある。ただ妖精の世界の上空を漂うアインクラッドは自分的には嬉しい実装だったがこの世界観からは明らかに浮いていた。

「一体何なんだ？わざわざ呼び出すなんて」

「すまない。ちょっと皆と話したい事があってな」

見ればいつもの面子が揃っている。といってもエギルやリズベットといった店を持つ者は除いてだ。

「話したいことって？」

「なあコハル。お前……絶剣って知ってるか？」

「なんだそれ？」

「今巷を賑わせてる辻デュエルやってるやつだよ。知らないのか？」
「生憎俺は今初めてＡＬＯでアインクラッドに来たからな。知らんよ」
「そいつが凄い剣の腕でな……」
　話を纏めるとなんか凄い強い剣の使い手がいるそうだ。ほほう
「場所は？」
「一気に目の色変わったな、おい。午後３時に２４層の小島だ」
「その言い方は……戦ったのか？」
「でもお兄ちゃん負けちゃったんだよ！」
「でもキリト君は二刀流使わなかったけどね」
　アスナさんとリーファさんの話を聞いた俺は
「それは……面白い！行くぞ！」

　午後３時、第２４層小島
「ふむ、ここが……」
　小島には多くの人が詰めかけていた。真ん中にぽっかりと人だかりが無い場所がある。
「どれどれ……!?」

そこにいたのは一人の男と一人の少女。見た感じ少女が優勢のようだ。
「いけー！絶剣！」
「あの少女が……絶剣？」
確かにかなりの腕前のようだ。終始圧倒している。そして
ｗｉｎ
ユウキ
ふむ、絶剣の名前はユウキというのか
「誰か他にやりたい人いませんかー!?」
かなり元気の良い声だ。木綿季を彷彿とさせるな。どれ
「私がやろう。いいかな？」
「「あれは……侍!?」」
長い刀一本でユージーンに勝ったのが広まり侍と呼ばれるようになったコハル。
「ん？お兄さんやるの？おっけー。じゃあルールはどうする？空中戦あり？ボクは何でも良いよ」
名前がユウキで一人称がボク……いやいや考えすぎだ。第一これはＭＭＯＲＰＧ、俺のようにキャラを作ってるやつもいるんだ。
「地上戦で頼む。空は苦手だ。魔法も無しで」

「うん！良いよ」
そう言ったユウキの背中からインプ特有の蝙蝠のような羽が消える。
3
「じゃあ、行くよ！」
2
「ああ、望むところだ」シャリン
1
「参る！」
ピーッ！
「ッ！」
中々に鋭い速い剣だ。キリトに匹敵するんじゃないか？これ、だが
キィン！
「その程度の速さならば見切れるぞ？」
「でもそんな長い刀じゃ小回り効かないよね！」
ご名答。弾かれて私が構えた時には既に相手の剣が迫る。しかし
「予想の範疇よ！」
ダッ

バックステップでこれを避けて切りかかる
「セァア！」
ギン！
暫く打ち合いが続く、だがコハルの目は爛々と輝いていた。
「これほどとはな！素晴らしいぞ！絶剣！」
「そっちこそ！この間の黒いお兄さんと同じくらい強いよ！」
ギャリン！
一際大きな音と共に一旦距離を取る二人
「ところで何故このような真似を？」
「強い仲間が欲しくてね」
「私はその黒いのと知り合いでね。はっきり言ってあいつは相当強いぞ？あいつで良いんじゃないか？」
「駄目だよ。あの人は。理由は言えないけどね」
「そうか。さて、話はここまでにしておいてそろそろ決着と行こうか」チャキン
「ん？今まで構えなかったのに構えた？うん！望むところだ！」
間合いはバッチリ
「秘剣、燕返し」

ヒュオッ

今までありとあらゆる敵を葬り去ってきた秘剣が絶剣に迫る。

「ッ!!」

ドギャン!

「何?」

だが仕留め損なった。今まで防がれたり弾かれたことはあったが避けられたことは一度も無かった。当然である。絶対に必殺の一撃を浴びせる、そのための燕返しなのだが……

「驚いたけど下がれば当たらない!」

絶剣は突進していたが燕返しを見るや否や咄嗟に後ろへ飛んだ。その結果

「ぐぬぅ」

放った三本の刀は一点でぶつかり合いコハルの動揺も相まって決して小さくない隙が生まれる。絶剣にとってそれは十分過ぎる隙であった。

ヒュイーン

「手加減はしないよ!」

エフェクトを纏う剣。

ザシュキンザシュザシュザシュ!

連撃系のソードスキルなのだろう。体に次々と突き刺さる剣。何とか弾こうとするも間に合わず一部のしか弾けない。
ザシュザシュキンキンザシュ！
ここで一旦剣が途切れる。我に帰ったコハルは
「これで打ち止めか！秘剣！」
ヒュン！
「何!?」
既に１０連撃が放たれた。その時点で桁外れのスキルなのに、１１連撃目があった。
「見事……」
燕返しの構えの為迎撃も避けることも出来ず思わず目を閉じるコハル。ＳＡＯからやってきて初めての完全敗北であった。が、
「ん？」
いつまで経っても切られる感触がない。恐る恐る目を開けると
チャキン
目の前で剣が止まっていた。明らかに寸止めである。
「何のつもりだ？」
すると絶剣は構えた剣を仕舞うと

「うん！お兄さんに決ーめた！」
晴れやかにそう言う絶剣。そして
「今までありがとうございました！デュエルはこれで終わりでーす！」
手を振って去る絶剣。その姿が見えなくなりふとメニューを見ればそこには
『ここに来てね！』
地図と時間が添付された絶剣からのメッセージが届いていた。

現実世界、自室
「うーむ、聞いてみるか」
聞いてみる、とは勿論今日出会ったあの少女のことである。木綿季とは一緒にゲームをするとは言ったものの準備と都合が付かず未だに出来ていない。
コンコン
「木綿季、ちょっといいか？」
「……」
「むう」
返事がない。一応親しき仲にも礼儀ありと言うので無断で入ったりはしないことにしている。

「夕飯の時にするか」

そして夕飯

「なあ木綿季ちょっと聞きたいことがあるんだが」

「ん？何？」

「疑ってすまないんだがＡＬＯやってたりしないよな？」

「・やってないよ？」

間があった。いやかまさかね？

「俺に隠してること・・・・・無い？」

「むー、ボクのこと疑ってるの？」

「いや、そういうわけじゃ無いんだがな・・・・・」

何かを隠してるのは確かか、だがまあ今聞くようなことでも無さそうだ。

「すまない。疑ったりして。ごちそうさま」

木綿季は部屋に戻る謙二をどこかホッとした表情で見送った。

謙二が去ったリビングでは

「あ、あ、危なかったー！」

木綿季が大きく息を吐いて突っ伏した。というのも
「流石に勘づかれたかな～」
何を隠そう（隠せてないけど）ここにいる木綿季こそが絶剣ユウキの中身だったりする。
「でもまだ謙二に知られる訳にはいかないんだ！」
決意を新たにする木綿季であった。

「ふむ、ここか」
所は戻ってきてＡＬＯ、コハルは呼び出しのあった場所に向かうとそこには一軒のプレイヤーホームがあった。
「入っていい・・・んだろうな。この中が指定の場所だし」
恐る恐るドアを開けると
「あっ！コハル！やっほー」
「こらユウキ、あなたは・・・・・」
元気よく手を振るユウキの姿が
「ここで合っていたかな？」
「うん！ようこそ、ボクのギルド、スリーピングナイツへ！」

「コハルだ。よろしく」
「早速なんだけどね……」
　端的に言うと最前線のボスをこの面子で倒したいと、でも戦力が足りないからあんなことをやっていたと、そういうことらしい。だが
「だが何故？無理にこの少人数で挑まなくても他と協力すればクリアはできるだろう？」
「それじゃダメなんだ。それだと石碑に刻まれるのはそれぞれのギルドのマスターだけ。ボク達はここにいる皆の名前を刻みたいんだ！」
　必死に訴えるユウキ。そこまで言われると、なぁ
「分かった。最大限手伝おう」
「ありがとう！」
「気にするな。昔一人でボスに挑んだときよりはマシだ」
「一人でボスに!?凄いね！」
　ああ、ギルドってこんなに楽しいところなんだな。入れば良かったかな……

　そして翌日
「じゃあ早速行ってみよー！」

「「おー！」」
　向かうはボス部屋。すでにボス部屋までは攻略されていた。するとボス部屋の手前で
「……誰だ？」
「ん？どうしたの？」
「あの柱の影、怪しいな。誰だ!?」シャリン
　刀を抜きにじりよるコハル。すると
「ま、待ってくれ！」
　サラマンダーの男が姿を表す
「不意打ちのつもりか……切る！」
「おい、話をk」
　ヒュオッ
　パシャーーン
　チン
「よし行くぞ」
「ねえ、良かったの？問答無用で切っちゃって」
「ここは攻略済みのほぼ安全地帯。仲間を待っていたにせよ何にせよ魔法で姿を隠す必

要はない。となれば十中八九不意打ちもしくは尾行して偵察といったところか。ついでに言えば身を隠さないといけないほど貧弱な装備でも無かったしな」
「へえ、凄いね。ところで何で気がついたの？ボクの索敵スキルには引っ掛かって無かったのに」
「勘だ。長年のな」
　伊達にあの鋼鉄の城で鍛えられていない。気配で分かるのだ。
「では、行こうか。ボスへ」
「うん！」
　ギィィィィィィィィ
　重々しい扉が開く。そこには
　グルゥ……
　一つの体から二つの首が生えた巨人がいた。
「まずはモーションの確認だ。敵の攻撃を全て把握するんだ！」
「「はい！」」
　時に近づき、時に離れ、敵の攻撃を誘う。攻撃せず避けることに集中すればダメージは食らわない。
「粗方出終わったか。次は隙を見つけて攻撃だ。行くぞ！」

「「はい！」」

とても初めてのボス攻略とは思えないテンポの良さ。

「うーむ、余りダメが入らないな」

「どうするの!?」

「狼狽えるな。こういうのは大抵どこかに弱点があるか、ステージにギミックがあるものと相場が決まっている。見た感じあの胸元の宝石が怪しいな」

「でもあの高さは届かないよ?」

「やりようはある。タルケン！俺の指示する場所で盾を斜めに構えてくれ」

「了解だ！」

「シウネーさん！ユウキにありったけのバフを！俊敏系と攻撃力系だ！」

「了解です！」

ボスの背後で盾を構えるタルケン。シウネーが詠唱すればユウキを暖かな光が包み込む

「ユウキはタルケンの向かって右側で待機！」

「分かった！」

「よし、行けるぞ。こっちだ！」

ボスの足元でひたすら切り続けヘイトを稼ぐコハル。当然ボスの注意はそちらに向

き

グァァァァ!!!

「甘い」

ギィィィィン！

鈍い音と共にボスのハンマーがカチ上げられ仰け反る。

「行け！ユウキ！」

「うん！」

俺はタルケンの目の前でパリィに成功した。つまり

ダッ！

ユウキが助走を付けて、インプの強みである室内飛行も使って

「やぁ！」

タルケンの盾を踏み台に飛ぶ、そしてちょうど胸元の宝石の目の前であの１１連撃のソードスキルを放つ。そしてシステムの都合上ソードスキルを放つとプレイヤーの体はそこに固定される。よって

ズガガガガガガ・・・・・・

ユウキの体は空中で止まり１１連撃全てを宝石に叩き込む。するとみるみるうちにボスのＨＰゲージが減っていき

パシャーーーン！
ボスの巨体が砕けた。
「やった……のか？」
「ああ、我々だけでボス攻略を成し遂げたんだぞ」
シュタ！
「やったぁぁぁぁ!!!!ありがとう!!」
着地するやこちらに駆け寄るユウキ。
「どういたしまして、だ」
ダキッ！
「本当にありがとう！すっごい嬉しいよ！」
「ああ、分かったから。分かったから離れてくれ。これでも俺は男だぞ？」
ＶＲは表情を隠せない。恐らく俺の顔は真っ赤だろうな。
「……ふうん」
「な……なんだ？その目は」
「別に……」
何かを悟ったような目をするユウキ。俺から離れると
「じゃあ早速確認に行こう！」

第1層黒鉄宮

「どれどれ……あった！皆の名前もあるよ！」

ユウキが指差す先にはしっかりと俺たち全員の名前が刻まれていた。このゲームが終わるそのときまで永遠に残る記録だ。

「写真でも撮るか？ほれ」

「おお、撮影結晶とは用意周到だね」

「使う機会が無かったからな。ほら皆集まれ」

パシャリ！

「よし！じゃあこのあとはホームで打ち上げでもしよう！」

「「賛成！」」

# 縁の形

スリーピング・ナイツ、マイホーム

「それじゃあボス攻略を記念して……かんぱーい！」

「「かんぱーい！」」

黒鉄宮で記念撮影をした後、全員で打ち上げをすることになった。

「しっかしまさか一回で攻略出来るなんてね！」

「まあこれだけの人数がいれば可能ではある」

やいのやいの

攻略の喜びを皆で分かち合う。以前のアインクラッドでは考えられなかったことだ。

「そういえばふと気になったんだがな……」

「ん？何？」

「このギルドの名前、スリーピング・ナイツなんだが、何故この名前を？言っちゃ悪いがあまり縁起が良く無さそうなんだが……」

「それは……」

回りを見渡すユウキ、皆の顔色は優れない。不味い、地雷を踏んだか？

「ああ、いや。言いにくいことの一つや二つあるもんだ。すまないな、こんなことを聞いて」
「いや、いいよ。話そう。でも、その前に……」
「ん？」
もじもじするユウキ、そして
「その、間違ってたらごめんなさい」
「何がだ？」
「本当に協力してくれてありがとう。謙二！」
「……へ？」
恐らく今までで一番間抜けな声が出た

「えーと……いつから気がついてた？」
「家で聞かれたとき。それとやたら女の人と距離を取ってたから。謙……コハルは女の子に対する耐性低いじゃん」
「う、ぐ……じゃあ何で隠してたんだ？」
「サプライズのつもりだったんだけどね……まさかこうなるとは思ってなかったよ」
「そうだったのか……」

「ごめんね、騙してて」
「気にするな。それで……」
「うん、皆、この人になら話しても良いよね？」
「「うん」」

「ボクが彼らと出会ったのは結構前なんだ」
「今は元気だけど一回ＡＩＤＳが発症しかけてね、入院してたことがあるんだ」
「その時出会ったのが皆なんだ」
　それを聞いた俺は思わず
「じゃあ、スリーピング・ナイツっていうのは……」
「うん。所謂不治の病にかかってた皆、だから眠る騎士達、スリーピング・ナイツ」
「最もボクとシウネーは回復の見込みがあって今は不治では無いんだけどね。発足当初は皆そうだった」
「実はこのギルドはね、ボクが作ったわけじゃ無いんだ。ボクの姉ちゃんが作ったのを引き継いだんだ」
「……」
　何故引き継いだのかは聞くまでもない。亡くなったんだろう。お姉さん。実際に俺

と会ったときは一人ぼっちだって言ってたしな。
「皆余命が宣告されてた。だからこそ自由に動けるこの世界にボク達が生きてた証を残したかったんだ……なんかごめんね。湿っぽい話になっちゃって」
「そうだったのか……ありがとう。言いにくいことだろうに聞かせてくれて」
「いいのいいの。だって……」
　ユウキの見つめる先にはニコニコしたシウネーさん
「あなたがいないとき散々ユウキから聞かされてましたから。あなたになら聞かせても受け入れてくれると思いました」
「そうでしたか……」
「まっ、ボクを受け入れてくれたコハルがスリーピング・ナイツを受け入れない訳が無いけどね！予想通り！」
「良く分かってらっしゃる」
「それはそれとしてさ、実はボク達ってＡＬＯ以外にも色んなゲームを遊んできたんだ！」
「それは気になるな。例えば？」
「あれはアメリカのね……」

　それから数時間後
「じゃあ名残惜しいけどここまでだね」
「ん？それはどういう意味だ？」
「実はね、今回のボス攻略が無事終わったらこのスリーピング・ナイツは解散する予定なんだ」
「なんで!?」
　寝耳に水で驚くコハル
「言ったと思うけど今回はボク達が生きてた証を残すことが目的なんだ。それと・・・」
「ボクの姉ちゃんが死んだときに決めたんだ。次一人いなくなったらギルドを解散しようって。それで突然いなくなるより皆揃ってる時に解散しようってね」
「まさか・・・・・・」
「うん、そのまさか。ここでは元気そうにしてるけどこのギルドの大半はリアルでは死にかけなんだよ。既に一人余命宣告が間近の人がいるんだ」
「それで・・・・・」
　言葉が見つからない。第一こんなに笑顔で元気な皆が死にかけてるなんて信じられない。信じたくない。

「そんな顔しないでよ。生きてた証は残せたし、ボク達のことはボクを含めて皆の宝物だからさ。それに……」
「何て言うんだっけ？昔コハルが良く言ってた言葉があるじゃん」
「……縁……か？」
「そうそれ！皆がこうして集まれるのも縁ってやつでしょ？だから悲しむのは違うかなって」
「そう……だな」
　ならばせめて……
「ならむしろ笑顔で別れないとな！」ニコッ
「そうそう！……じゃあスリーピング・ナイツのギルドマスターとしてここに……」
　皆を見渡すユウキ
「解散を宣言するよ！皆、今まで本当にありがとう！皆のことはいつまでも忘れないからね！」
　響き渡るユウキの声に皆は声を揃えて
「「じゃあまたいつか！」」

そして現実世界へと戻る謙二、真っ先に向かったのは

コンコン

「入っていいか？」

「うん、良いよ」

何だかんだで初めて入る木綿季の部屋はぬいぐるみとかが置かれた年頃のザ・女の子の部屋、という感じだった。

「しかし驚いたな。まさか既にＡＬＯをプレイ済みだったとは。参考までにいつ頃始めたのか聞いてもいいか？」

「謙二があの事件に巻き込まれてから一年が経ったとき。元々あのメンバーで色んなＶＲゲームを渡り歩いてたからさ。謙二が始めなかったらこっちから誘う予定だったんだよ」

「そうだったのか……ん？」

目的を果たした筈の木綿季の顔色は優れない

「どうしたんだ？辛気くさい顔して。スリーピング・ナイツが恋しいのか？」

「それもあるけど……なんかさ、今だから言えるけどボクはスリーピング・ナイツの皆に対して罪悪感があったんだ」

「なんでまた？」

「言ったでしょ？皆残り少ない命だって。なのにボクとシウネーだけは助かる見込みが見えちゃったから。ボク達だけ助かるのが申し訳ないというか・・・・」
「何言ってるんだよ・・・・・・・」
　思わず低い声が出る
「いつもの元気な木綿季はどこ行った。自分だけ助かるのが申し訳ない？他の人の分も生きればいいだろ！」
「謙二・・・・・・・」
「頼むから・・・・・もうそんなこと言わんでくれ」
　普段は木綿季に対して声を荒げることは無い謙二がそうぶちまけた
「もう一人はやなんだよ・・・・・・」
　想像してしまった。木綿季がいなくなって一人になったときのことを。一人ぼっちは慣れている筈なのに耐えられない。それほどにこの生活が当たり前になっていた。
「・・・・・・・・ごめん。ボクらしくなかったね！もうあんなこと言わないからさ。顔上げてよ」
「ん？」
　ポンッ
「基本家から出ない上出るときはボクと一緒だから気がつきにくいけど謙二の人間不信

もまだ治ってないしね。あれが治るまで死ぬ気は無いよ」
「うぐぐ、すまん」
（精神的に）年下の女の子に撫でられるのは嫌いな筈だが不思議と心地よい。いかん。本格的に木綿季無しで生きられない体になりそうだ。それに安らぐ……
「不味いな、この生活に溺れそうだ……」
「溺れちゃいなよ。ボクは死ぬまで離れないから。フフッ計画通り」
んん！何やら悪寒が…風邪か？

それから数日後
「突然だが木綿季、デートに行かないか？」
「どうしたのさ？藪から棒に」
「いや、今まで何だかんだで時間取れなかったしさ、学生のうちに行きたいと思ってね」
「本音は？」
「この間の結構引き摺ってます。正直辛いです。木綿季が居なくなる夢を毎日見ててマジでヤバいです。助けて下さい」
「それで最近元気無かったんだ、末期じゃないか……良いよ。でも言い出しっぺは謙二なんだから行き先とかちゃんとしてよね？」

「期待はせんでくれ」
「はいはい」

「まさか……これは予想外だよ。ボクじゃなきゃ即刻別れてるよ」
「やかましいわ！こちとら今も昔も恋愛ド初心者じゃい！だから言っただろ！期待するなって」
　俺がデートに選んだ場所、そこは
「本当に予想外だよ。確かに場所はいいけどさ……」
　ＡＬＯ内の有名デートスポットの公園だった。
「だって!?外行くのは怖いしお金かかるし雨とか降ったら最悪だし……ここならその心配無いからさ」
「アバターじゃない本物の謙二が良かったんだけどな……」
「言わんでくれ。決めておいてなんだがスッゴい後悔してる」
　頭を抱える謙二を木綿季は
「まあいいよ。謙二とならどこだって良いからさ。さて、どんな風にデートするの？」
「さ、散歩とか？」
「うん！期待したボクが間違ってたよ！」

「本当に……すんません……」
「やれやれ。どうせＡＬＯなら……それ！」
「うわぁ！」
　ＡＬＯでしか出来ないこと。それは飛ぶということ
「そうか、むしろＡＬＯでしか出来ないことをすれば良かったのか！」
「気がつくのがおそーい。後、それだけじゃないよ」
「何が？」
「上を見てみて」
「上？……!?」
　そこには天井があった。外なのに。だが少しずつ動いているそれは
「アイン、クラッド、これがどうした？」
「これ、凄く大きいよね」
「そうだな」
「これ、どんな風に見える？」
　どんな風に、か。なら
「凄くデカイ城だな」
「そういうのじゃなくてさ。謙二にとってあの世界はどうだったの？」

「……残酷な世界だが、とても充実した城だったよ。悪人も善人もいた、それが良かったよ。今じゃ大勢の妖精が闊歩するカオスな城だけどな」
「それだよ……」
「それ？」
「今何て言った？」
「カオスな城だって……」
「その前」
「悪人も善人もってやつ？」
「そうそれ。まだ気がつかない？」
「何がだよ」
「限りなくあの城は現実に近い。ならさ、いると思うよ。現実にも謙二を受け入れてくれる人がさ。少なくともボクや両親はね」
「……」
　そう、そもそもの俺の人間不信の発端は帰還直後のご近所さんの陰口だ。端から見れば下らないと思うかもしれないが当時の俺にはトラウマになるに十分過ぎた。
「皆が皆謙二を、帰還者達を差別してる訳じゃない。もう一回試してみようよ。もしそれでダメだったならその時考えよ？」

「あ、ああ。全くもってその通りだな。やってみるよ。しかしなんだな。これじゃデートという名のいつものゲームだな。木綿季の説教付きのな」
「まあボク達らしくていいじゃないか」
「違いない」

ＡＬＯから戻ってきた俺は早速外に出てみることにした。だが木綿季無しでだ。今まで外に出るときは何があっても木綿季がそこにいた。正直、怖い
「世の中捨てたもんじゃない。行ってみるんだ！」
足は震える。だが進めない訳じゃない
「じゃあ、軽くこの辺りを回ってみるよ。何かあったら電話する」
「頑張ってね」
「応さ」
スッ
小さな、それでいて俺にとってはとても大きな一歩。
「行ける、行けるぞ！」
久々の俺だけの外出。ふと、目の前を一人の子供が通る
「こんにちは！」

純粋無垢な子供は誰にでも挨拶をする。されたら返すのが道理
「こ、こんにちは」
詰まったが何とか返せた。子供は満足げに去っていく
「だいぶマシになったな……」

「ただいま」
「お帰り。どうだった？連絡が無いってことは異常なし？」
「ああ、俺、外に出られたよ。話せたよ……」
「そうだね。良かったね。今の気持ちは？」
「訳が分からん。嬉しいようななんというか。ただひとつ言えるのは……」
「木綿季のあの言葉で救われちまったよ。あっさりしてんな」
「謙二って何かと考えすぎて抱え込むじゃん？あのやり方なら効くかなって」
「なんか、助けられてばかりだな……」
「そんなことないよ！」
「!?」
珍しく木綿季が声を荒げた
「まあ自覚無いだろうけどボクも何だかんだで謙二にスッゴい救われてるんだよ。下手

したら今ここに居なかったかもしれないレベルでね」
「そーなのかー」
「むぅ～。信じてないな～？」
「シンジテルヨー」
「……」
多分気がついてないし今後も気がつくことは無いんだろうな。小学校のあの日のことは忘れないからね。
「さてと！じゃあ飯にしますか！」
「作るのはボクだけどね？」
偶然小学校で出会い、偶然虐めから助けられ、偶然ＡＩＤＳが発症しなかった木綿季
偶然ＳＡＯに巻き込まれ、偶然ご近所さんの陰口を聞いて人間不信になり、偶然木綿季の一言で外に出たとき普通の子供に挨拶され少しは人間不信がマシになった謙二
案外この世の全ては偶然の上に成り立っている。それに理由を付けるなら……そう
縁と言うのだろう。